第９回「里山シンポジウム」報告書

松前記念講堂
2F

第九回　里山シンポジウム　in　市原
会場　東海大望洋高等学校　松前記念講堂

里山に託す私達の未来
第9回里山シンポジウム in 市原
里山の魅・力発見
～中房総の原風景を支える広子力～
2012年 5月 27日

目　　次

ページ

■ 目　　次　　里山シンポジウム実行委員会（2012）構成メンバー　2
■ 参加・協力団体　3
■ 分科会開催日程　4
■ 開会あいさつ　千葉県農林水産部　森林課長　野村 浩　5
市原市長　佐久間 隆義　6
里山シンポジウム実行委員会 代表　金親 博榮　7
■ 中房総の小さな旅　報告
小さな旅開催あいさつ　（いちはら里山クラブ）　風間俊雄　8
プラン１　1 都 10 県を見はるかす御十八夜（おじゅうはっちゃ）からの眺望　11
担当者：鶴岡清次　報告者：杉田初代
プラン２　手付かずの古墳群・古城址を巡る旅　12
担当者：風間俊雄　報告者：石崎千恵
プラン３　新緑の養老渓谷を歩く 素掘りトンネルと不動の滝　駅には足湯もあり　13
担当者：金子美智男　報告者：鶴岡清次
プラン４　菜の花の小湊鉄道沿線を歩く 波の伊八に出会う旅　14
担当者：高橋和靖　報告者：桑波田和子
プラン５　古代市原　発見ウォーク 〈国分寺“北斗七星”〉　15
担当者：遠山、堀部　報告者：杉田 健
プラン６　懐かしいふるさとの味と野鳥さえずる市民の森散策　16
担当者：鶴岡清次　報告者：杉田初代
小さな旅総括　コメンテーター 小湊鉄道株式会社 取締役社長　石川晋平　17
■ 映像と音で綴る里山　演 奏:望洋高等学校吹奏楽部　展 示:生物部　18
■ 行政からの報告　千葉県：千葉県の森林･林業･里山の現状　19
千葉県農林水産部森林課森林づくり推進室長　武井 良彦
市原市：里山保全に向けた市原市の取組み　23
市原市経済部農林業振興課　課長　桐谷 芳孝
■ 基調講演　北川フラム　25
■ パネルディスカッション　遠山あき、林 秀一、佐久間隆義、コーディネーター：高橋和靖　51
■ 分科会報告　61
■ 閉会挨拶　里山シンポジウム実行委員会事務局（東金青年の家）　並木秀幸　78

司　会：小西由希子（里山シンポジウム実行委員会副代表　NPO 法人ちば環境情報センター）

里山シンポジウム実行委員会（2012）構成メンバー
代　表：金親 博榮　副代表：小西 由希子、栗原 裕治　事務局：並木 秀幸　会　計：桑波田 和子
いちはら里山クラブ：高橋 和靖、風間 俊雄　米沢の森を考える会：鶴岡 清次　分科会：（別 掲）
市原市スタッフ：若菜喜美雄、木藤 啓、鈴木 佳彦、鴇田 茂、渡辺　聡（経済部農林業振興課）
千葉県スタッフ：西野 文智、荒木 功介、福水 伯米　（農林水産部森林課）

分科会参加　協力団体

2012 年度　第 9 回里山シンポジウム in 市原　同時開催

「千葉の里山･緑を守る森人たち」パネル展

特定非営利活動法人ちば里山センター

理事長　金親　博栄

時下、益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

ちば里山センターの活動につきましては、日ごろより格別のご高配を頂き、厚くお礼を申し上げます。里山活動団体のパネル展同時開催のご協力に感謝申し上げます。

パネル展については平成23年度に千葉県環境研究センター、市原市と連携して、市原市を中心とする里山活動団体を紹介する【企画展「市原の里山･緑を守る森人たち」】を市原市内６会場で開催し、市原市の皆様に身近な里山情報を提供することができました。

平成24年度には、千葉県で活躍している里山活動団体を広く知っていただくため、千葉県環境研究センターと連携して、【企画展「ちばの里山・緑を守る森人たち」】の開催に取り組むこととしました。この企画展では、千葉県内の里山活動団体の活動情報をパネルに取りまとめ、一堂に展示する計画です。第9回里山シンポジウムin市原（平成24年5月27日）同時開催をメイン展示として実施いたします。皆様是非お立ち寄り下さい。なお、6月11日（月）～15日（金）きぼーる（千葉市）でも実施いたします。千葉市きぼーる会場もよろしくお願い致します。

≪市原市内の里山活動団体≫

里山樹楽
ふれあい千葉
風呂の前里山保存会
房総森輪会
上総更級会
市原米沢の森を考える会
市原写友会
いちはら里山クラブ
炭友会
おとずれ山の会
南市原里山連合
喜動房倶楽部
安由美会
上古敷谷里山の会
南市原花いっぱい実行委員会
南市原応援団
三島会
石神なの花会
めだか塾
花と緑の会
桜さんさん会
市原市里山交流会

≪市原市以外の里山団体≫

谷当グリーンクラブ
さんむ・ｱｸｼｮﾝミュージアム
NPO 法人ﾊﾞﾗﾝｽ 21 谷当里山計画
東京都市大学田中章研究室、
NPO 法人千葉まちづくりｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ
利根川運河の生態を守る会
東邦大学
野田自然共生ファーム
さんむフォレスト
LLP グループ「木と土の家」
癒しの森実行委員会
ﾜｰｸﾎｰﾑ里山の仲間たち
千葉詩亭
Poe-Tri（ポエ-トライ）
下泉森のサミット
里山里海自然づくり事業をする会
夷隅郡市自然を守る会
ちば谷津田再生会(記念病院)
環境パートナーシップちば
ヤマトミクリの里づくり協議会
ﾌｨｰﾙﾄﾞﾐｭｰｼﾞｱﾑ・三番瀬の会
ちば・谷津田フォーラム
NPO 法人ちば環境情報センター

第９回　里山シンポジウム
発行：里山シンポジウム実行委員会

分科会開催日程

分科会名		テーマ	担当者	連絡先	開催月日
第１	農業分科会	北総の農林業の歴史の勉強会	金親博榮	043-239-0645	2 月 25 日終了
第２	生物多様性の米づくり・里山バンキング	生物多様性の米づくり・里山バンキング	金親博榮 バランス 21 谷当里山計画	043-239-0645	4 月 8 日終了
第３	有馬朗人先生と里山で俳句を楽しむ会	森の息吹を感じながら句会を楽しむ	杉田 健 米沢の森を考える会		3 月 4 日終了
第４	暮らしの中に森の癒しを	里山で日ごろの暮らしを見直し、エコや自然との共生を考え、生活実践につなぐ	高橋和靖 おとずれ山の会	0436-36-3773	4 月 8 日終了
第５	里山で旬の山野草を楽しむ会	里山で旬の山野草を楽しむ活動	風間俊雄 いちはら里山クラブ	0436-66-7908	4 月 21 日終了
第６	生物多様性農業による地域づくり	生物多様性農業による地域づくり・トキ再来の夢とともに	中村俊彦 ちば･谷津田フォーラム		9 月 17 日終了
第７	里山とアート	里山発、アートを通じて心を繋ぐ	大島健夫	090-4540-0085	12 月 15 日終了
第８	森林・林業	なるとうこども園現場見学会＆木質バイオマスセミナー	稗田忠弘 さんむフォレスト	090-2566-1090	10 月 27 日終了
第９	和田地区	和田未来農業研究会 シンポジウム 「新しい日本農業のかたち 和田から発信！！」	荒尾 稔		10 月 28 日終了
第 10	野生動物	房総のアライグマ	手塚 幸夫 中野真樹子		2013 年 2 月 9 日終了
第 11	三番瀬 フィールドミュージアム	三番瀬フィールドミュージアムｉｎとびのだい　三番瀬の鳥たちの今	佐藤聰子　栗原裕治 田久保晴孝 田澤浩一	043-310-3300	2013 年 2 月～3 月
第 12	医療・福祉	森林療法ワークショップ	増田 淳　林みね子 赤城建夫		4 月 15 日 ～2 月 17 日
第 13	里山団体・地域相互連携による里山活動	地域相互連携による里山活動	藤崎義雄 ふれあい千葉		10 月 13 日
第 14	映像と音で綴る里山	里山の美しさを映像と音で再認識	石川松五郎 市原写友会	0436-22-2277	5 月 27 日実施
第 15	里山再生と生物多様性の力	トキ（鴇）よ　よみがえれ ～日本の太平洋岸最後の生息地 市原の谷津田の生物多様性～	中村俊彦 ちば･谷津田フォーラム 小西由希子 ちば環境情報センター	043-223-7807	2013 年 2 月 17 日終了
第 16	里山と希少種保全	カタクリなど自生希少種の保全	中山美代子 風呂の前里山保存会	0436-52-7487	4 月 8 日終了
	政策分科会	生物多様性地域連携促進法にもとづく地域連携保全計画づくり	小西由希子 ちば環境情報センター	043-223-7807	5 月 21 日終了
		いのちを育む印西の原っぱ	亀成川を愛する会	080-5081-6046	6 月 2 日
		コウノトリ復活をシンボルに里山の生態系を復元する	佐野郷美		7 月予定

順不同

第９回里山シンポジウム開会あいさつ

千葉県農林水産部　森林課長　　野村　　浩

皆様、おはようございます。５月も終わりになりまして、新芽が出ていたのも一段落しまして、自然界もだいぶ落ち着いてきたかなと思います。私は、県庁森林課の課長の野村でございます。ここ市原市で、第９回の里山シンポジウムが開催されるに当たり、一言、ご挨拶を申し上げます。

本日、ここに第９回里山シンポジウム、多くの里山関係者をはじめとする皆様方のご尽力によって、盛大に開催されましたことに、まことに感謝申し上げます。

また、共催していただいた地元市原市さん、NPO 法人ちば自然学校さん、それからここの会場を貸してくださいました東海大学付属望洋高等学校さん、千葉県緑化推進委員会さん、また小湊鉄道様にはいろいろなイベントに出ていただき、このイベントを盛り上げていただいたこと、誠に重ねましてお礼申し上げます。

さて、県では毎年５月１８日を「里山の日」と定めており、この日に合わせて毎年そして今年も行事が開催されております。里山の活動には、本日ご参加の皆様をはじめ、いろいろな方が参加され、さまざまな活動、体験を通じて里山への関心あるいはご理解を深めていただいているところです。

里山は、昔は、童話の桃太郎に出てくるように「お爺さんは山に柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に」の世界として、薪や落葉を集める貴重な空間でした。しかし、戦後の燃料革命とか、それに伴う電気ガスへの燃料転換、肥料の化学肥料への転換、こういったもので人々の生活様式も大部変わってきております。それは、ここにお集まりの皆さんは十分にご存じのことと思います。

日本は国土の 2/3 森林であり、また、千葉県は、県土の約 1/3 森林であり、そしてここ市原市は千葉県の中央部に位置し、自然公園、鶴舞であったり、養老渓谷、こういった貴重な自然がたくさんある場所でございます。豊かな自然と生物多様性に恵まれた里山が多く残されているところですが、ここで、今日行われるシンポジウムのテーマである「里山の魅力発見」～中房総の原風景を支える底ヂカラ～は、市原市を中心とした中房総（なかぼうそう）の自然・歴史・文化等を確認しながら里山について考えることとしています。

こうした催しものに参加していただくことをひとつの契機として、千葉県そして日本全体の里山の魅力を再発見していただければと思います。どうしたら里山が元気になるかといったことも非常に重要なことと思いますので、今日一日、ここにお集まりの皆さまにはシンポジウムを通じて、中のものを持ち帰っていただければ、ありがたいことと思います。

「第９回里山シンポウム in 市原」の開催にあたって

市原市長　　佐久間 隆義

皆さんおはようございます。ただ今ご紹介をいただきました市原市長の佐久間隆義でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、この市原市において、金親様を中心に「第９回里山シンポジウム in 市原」を開催され、たくさんの皆さんにお集まりいただきましてありがとうございます。里山シンポジウム開催に当たり、大勢の方々のご尽力に地元市長として感謝申し上げます。

本シンポジウムのテーマは「里山の魅・力発見～中房総の原風景を支える底ヂカラ～」です。また、本日のシンポジウムに先立ち、市原の里山、文化を伝える「小さな旅」を６プランも実施していただいております。

さて、ここ市原市を中心とした４市６町のエリアを「中房総」として位置づけております。まもなく圏央道が開通し、市原市南部に（仮称）市原南インターチェンジが設置されます。これを中房総の玄関口とし、近辺の地域を活性化させなければと考えています。

市原市では、来年度市制施行５０周年を迎えるにあたり、国際芸術祭の開催を予定しております。国際的にも著名な北川フラム氏を総合ディレクターとして迎え、里山の中でアートを表現することの素晴らしさを皆さんに知っていただくイベントにしたいと思っています。その一環として、すでに小湊鉄道飯給（いたぶ）駅には世界一大きなトイレも出来ています。

「森から海へ・海から森へ」どちらが先かわかりませんが、こういう表現があります。「海は森につながっている。また森は海につながっている。」 市原市も昭和３０年代に埋立て事業が活発に行われ、工業都市に生まれ変わりました。これに伴って、雑排水、工場排水などにより東京湾の生態系が悪化しましたが、その後の下水道の整備等により水もきれいになって来ています。森が、私たち生き物である人間に住みよい環境を与えてくれていることの認識と、海と森の良好な関係が非常に大切だと考えており、そういう意味でも今日のこの里山シンポジウムはとても意義あることだと思います。

これらの素晴らしい自然環境を一般市民の皆さんにも理解していただくことの重要さを痛感しています。今後とも緑のエネルギーと自然が大切であるということを、市民・行政も再認識し、これらが一体となって自然環境の維持にまい進していきたいと考えております。

そして市民の皆さん全員が幸せになっていただけるよう願っています。

主催者代表挨拶

里山シンポジウム実行委員会、ＮＰＯ法人ちば里山センター
代表　金親博榮

風薫る 5 月、一年中で緑が一番美しい季節となりました。本日は、多数の方々のご参加を戴き、ありがとうございます。

本年の開催地、ここ市原市は、房総半島の真ん中に位置し、古くから政治・文化・流通の要として発展してきました。昭和 30 年代以降は、臨海部の埋め立てや工場立地により, 地域の暮らしは大きく変わり、ゴルフ場、住宅地開発、また残土や産廃の不法投棄等により、里山はある種、見離された土地となる危機を迎えました。

そんな中、身の回りの豊かな環境、里山の自然を守りたいとの思いから、コツコツと粘り強く活動は続けられてきました。地域の方々によって守られ残った里山を、かつての景観を回復し、生活に隣り合った場として、農家、林家を含め、あちこちでボランティアの皆さんによる手入れが行なわれています。その結果、少なからぬ土地が、生物の命が賑わう、多様性の豊かな場所に回復しつつあります。

里山シンポジウム開催のきっかけとなった 2003 年の千葉県里山条例に基づき、県民・地主による契約を県が認定する里山協定の締結が促進されてきました。現在、認定数は 121 件に上り、着実な増加の過程にありますが、これは、県民の熱意に加え、県と自治体の後押しが功を奏し、全国一の里山活動県が築かれたものと思います。

特に市原市では、その団体数も多く、活発な活動を支える農林、観光、環境、市民活動など多くの部門にわたる積極的な姿勢が、その成果をもたらしたものと考えます。

さて今年は、本日の全体会に先立ち、地元市民の企画する、小湊鉄道駅とその周辺の里山や史跡を巡る「中房総の小さな旅」を実施しました。豊かな歴史を現場で学び、きれいに刈り込まれた法面の草地を見るたびに、そこに住む人の土地への思いやこだわりを強く感じました。 6 コースとも、予測を大きく上回る参加者を迎え、沢山の人々が里山の豊かさや美しさに興味をもち、今後の里山を守る何よりの力になるのであろうと改めて実感しているところです。

里山の美しさは、人がそこで暮らし、人の手が加わることによって支えられてきたものです。地球規模の気候変動などのグローバルな環境への対応と、このような各地での小さいけれども、シッカリと積み上げられたローカルな活動は、まさに車の両輪です。

一方、震災を機に、私たちは、人のつながりや生きる力の大切さを再認識しました。私も仲間と近所の谷津田の再生を、農林業と並行して手がけておりますが、係れば係るほどその難しさ、大変さに、先人たちの知恵と、粘り強さに頭が下がる思いです。今あらためて、里山とそこに暮らす人々の持つ力・魅力に気づき、里山再生は、地域作りに懸かっている事を銘記して、未来につながる里山活動を、千葉から日本に広げて行きたいとの思いで、このシンポジウムを開催いたします。

本日の開催にあたり、望洋高等学校の特段のご支援に加え、多くの地元の団体の皆様のご尽力を頂きました。心より御礼申し上げます。「できる人が、できる時に、できる丈の事をしよう」を、活動のモットーとして、里山再生によって、美しい千葉、素敵な地域づくりの輪を広げましょう。

中房総の小さな旅報告

小さな旅　開催挨拶

風間 俊雄（いちはら里山クラブ）

皆さんこんにちは。また本日、市原市以外からお越しの皆さん　市原市へようこそ・・

私、いちはら里山クラブの　風間と申します。本日、「2012 年（中房総の小さな旅）」の報告会の進行役を仰せつかりました。よろしくお願いいたします。

先程来、シンポジウム実行委員会代表の金親氏や総合司会者の小西さんからお話がありましたように、この度　ご縁がありまして、第 9 回　里山シンポジウムがここ市原市を舞台に開催される運びになりました。

市原市はこの地図でもお分かりのように千葉県のほぼ中央に位置していまして、千葉県でも１，２をあらそう大きな市であります。市の中央を背骨のように蛇行で知られています（養老川・や小湊鉄道が通っています。）

皆さんは市原市というと工業都市とのイメージを持たれている人が多いのではないでしょうか？ところがご覧のように工業地帯は JR から北の臨海部にほぼ限られており、その後背地域はすべて農山村の様相を呈しています。

南に行くに従い、ご多分に漏れず過疎化が進んでいます。放棄家屋、放棄山林・田畑が数多く見受けられます。

ここ市原市内では、この荒廃した里山の保全活動をしているボランティア団体が数十団体ほどもあります。千葉県下でも有数の里山保全活動が活発な地域でもあります。

そこで今回、この里山の保全活動を通して皆さんに　なにか発信できないか？を模索したわけです。

この度、この（中房総の小さな旅）は　市原市の養老川と小湊鉄道沿線を中心にして活動をしています　ボランティア団体と一部公民館活動団体が主催しまして、ほんの身近にありながら普段気が付かないその地域の魅力を再認識して、それを皆さんに発信できればとの思いで企画された次第です。

地図にもありますように、4 月上旬から 5 月にかけて 6 コースの（小さな旅）を企画・実施いたしました。毎回大勢の方の参加をいただきまして非常に好評裏のうちに終わることが出来ました。

これから各団体の方々にその報告をしていただきますのでどうぞお聞きください。

なお時間の制限から 1 団体 10 分程度の発表とさせていただきますのでご了承ください。

発表者の方にお願いいたしますが 9 分ほど経過しましたら時間の経過をお知らせしますので速やかにまとめをお願いいたします。では早速始めたいと思います。

最初は

プラン１　（実施日）　4月7日

（タイトル）　**一都十県を見晴るかす御十八夜からの眺望**

と題しまして、牛久駅周辺の旅　です。

担当者は（米沢の森を考える会）の鶴岡 清次さん

報告者は（米沢の森を考える会）の杉田 初代さん

＊ 歴史と文化がいっぱい詰まっている御十八夜と眺望の良さを満喫したいい旅でしたね・・

プラン２　（実施日）　4月14日

（タイトル）　**手付かずの古墳群・古城址を巡る**　筍掘りも楽しめます。

と題しまして、光風台駅周辺の旅　です。

担当者は（いちはら里山クラブ）の風間 俊雄さん

報告者は（いちはら里山クラブ）の石崎 千恵さん

＊ 雨にも負けず、筍・放射能にも負けずたくさんの参加をいただきましてありがとうございました。またこんなにも身近なところに埋もれている文化財を大事にしたいですね。

プラン３　（実施日）　4月21日

（タイトル）　**新緑の養老渓谷を歩く　素掘りのトンネルと不動の滝**

駅には足湯もあります。

と題しまして、上総大久保駅から養老渓谷駅周辺の旅　です。

担当者は（石神菜の花の会）の金子美智男さん

報告者は（米沢の森を考える会）の鶴岡 清次さん

＊ 市原市の観光スポットでありながら過疎化に直面している矛盾とそれにもかかわらず頑張っている地元の人たちの努力がよく見えた旅でしたね。

プラン４　（実施日）　4月28日

（タイトル）　**菜の花の小湊鉄道沿線を歩く　波の伊八に出会う旅**

と題しまして、飯給駅から高滝駅周辺の旅　です。

担当者は（おとずれ山の会）の高橋 和靖（ｶｽﾞﾔｽ）さん

報告者は（里山シンポジウム実行委員）の桑波田和子さん

＊ 古刹巡りとこれぞ里山という風景の中を散策し、一日をのんびりと歩けたいい旅でしたね。

プラン５　（実施日）　4月29日

（タイトル）　**古代市原、発見のウォーク　国分寺“北斗七星”**

と題しまして、村上駅周辺の旅　です。

担当者は（国分寺公民館）の遠山 さん、堀部 さん

報告者は（市原ネイチャークラブ）の杉田　健さん

＊ 上総の国、国分寺の歴史的意義と日本の東の都？との認識を新たにしたいい旅でしたね。

プラン６　　（実施日）　5 月 12 日

（タイトル）　**懐かしいふるさとの味と野鳥のさえずる市民の森散策**

と題しまして、飯給駅から月崎駅周辺の旅　です。

担当者は、（市原ルネッサンス）の松本 靖彦さん

報告者は、（上古敷谷里山の会）の林　町子さん

＊ 豊かな自然が残っている里山の自然観察とふるさとの味を堪能して、又チェンソーカービングというアートの世界へ連れて行ってくれたいい旅でした。

報告者の皆さん、どうもありがとうございました。
どれもとても素晴らしい発表でした。

これで（小さな旅）の報告を終わらせていただきますが、この（小さな旅）の総括といたしまして、小湊鉄道株式会社 取締役社長の石川晋平様より一言コメントをいただきたいと思います。石川社長様お願いいたします。

ありがとうございました。
本日の報告をお聞きになりまして、里山保全活動に興味を持たれた方、また里山保全活動に参加されたい方、たくさんおいでかと思います。
我々はいつでも皆さんのおいでをお待ちしています。
ご静聴ありがとうございました。

小さな旅　プラン１

１都１０県を見はるかす御十八夜（おじゅうはっちゃ）頂上からの展望

おじゅうはっちゃからの展望

テ　ー　マ：**御十八夜頂上からの素晴らしい眺望を楽しむ**
日　　時：平成 24 年 4 月 7 日（土）　10 時～１５時
会　　場：市原市米沢の森
参加者数：50 名
スタッフ：15 名
講　　師：埋蔵文化財調査センター　田所　真氏
趣　　旨：人の出入りもままならないほど荒れていた里山の整備・保全活動が進み森は活き活きと蘇った。住民に伝わる昔の姿を追い求め整備した結果、今では１都 10 県を見はるかす景観が広がる。山桜や大島桜を愛でながら、頂上からの眺望を楽しんで貰う。
内　　容：行人塚を出発し、金堀台古墳の殿塚・姫塚の前で、田所講師より説明を受ける。「最近南総公民館横の古墳発掘の際、貴重な埋蔵品が出土した。米沢の森の中に点在する古墳群についても大いに期待できる。月見の名所おじゅうはっちゃの地名の由来は行人塚（三山信仰）と関連する。山桜の群生地“桜房・花立野”などの地名は歴史文化との関係をつなぎ合わせ昔を繙く重要なカギになる。」とのこと。この地域を知る良い機会であった。草競馬跡地等⇒千手桜広場（１株から１０本など）⇒馬の背山桜⇒少しきつい登りの森の階段または緩やかな古道を通って桜房広場へ⇒御十八夜頂上⇒八坂神社⇒ハンノキ湿原⇒第１駐車場で解散。
ま　と　め：古墳時代からゆったりと時が流れ里山はいつも人間と自然を育んできた。昔の人たちも眺めたであろうはるか彼方の山々を見ながら歴史と文化の中に身を置いてみた。米沢の森は貴重な自然の宝庫であり、整備・保全を続けて次世代へ引き継がないといけないと思った。
森の手入れで蘇った桜たちは、つぼみがまだ固くて花見とはいかなかったが、人々が集い楽しむ心地よい時間だった。

桜の満開には少し早かった

ひだまり広場で昼食

市原米沢の森を考える会　　代表　鶴岡 清次

小さな旅　プラン２

養老川、安須・高坂台地　コース

安須古墳

テ　ー　マ：**手付かずの古墳群・古城址を巡る**
日　　時：平成 24 年４月１４日（土）10～１５時
会　　場：養老川下流～安須・高坂台地
参加者数：75 名
スタッフ：15 名
講　　師：埋蔵文化財調査センター　田中　清美氏
趣　　旨：養老川下流域にあたる安須・高坂台地の古墳群、古城址について、専門家による講義により身近に存在した遺跡を認識する。
内　　容：10:00 小湊鉄道光風台駅集合～養老川河畔～安須貝層～古墳群・城址（講義）～いちはら里山クラブ高坂活動場所（昼食）～里山樹楽（発掘土器の説明）～光風台駅解散 15:00

養老川を渡る小湊鉄道

見どころ：上養老橋より浅井橋付近の養老川河畔には､山田フラワーロードや安須あじさいロードがある｡桜さんさん会により植樹された桜や季節の風を感じながら河畔を散策。安須橋を渡り集落を抜けて台地に上がると森林浴を楽しむことができる｡雑木林には古墳群が確認されている。（古墳群や竹林は私有地のため立ち入りは許可が必要）春夏秋冬の自然の変化を味わうことができる良き散歩道である。安須集落に昔話、手付かずの古墳群や近隣の佐是城の出城であった安須･高坂城址についての講義を受け、「里山樹楽」で発掘土器に触れ昔日に思いを馳せる。地域の萱場跡の竹林で筍掘り体験をする。

台地からの見晴らし

ま と め：雨にもかかわらず 75 名もの参加者を得た。ウコンの試験栽培をしている「カンナファーム」の社長から漢方の話を聞いた。また、未調査分を含めて古墳が約 80 基もあり、安須・高坂城は佐是城の狼煙（のろし）台でもあったことがわかった｡サプライズの養老川のカヌー隊の歓迎、狼煙実演や「里山樹楽」でのカービング実演見学など盛りだくさんであった。

古墳群

雨の中の散策

（協力：いちはら里山クラブ、安須・高坂町会）　　担当：風間俊雄　佐久間薫正

小さな旅　プラン３
新緑の養老渓谷を歩　素掘りのトンネルと不動の滝
石神菜の花畑、里見八犬伝ゆかりの寺

テ　ー　マ：**過疎地における耕作放棄地の活用**
日　　時：平成 24 年 4 月 21 日（土）　10 時～１5 時 30 分
会　　場：上総大久保駅～養老渓谷駅周辺　石神菜の花畑
参加者数：50 名
スタッフ：7 名
講　　師：無し
趣　　旨：養老渓谷は観光地として知られているが、周辺地域は過疎化が進み限界集落化した現状が目につく。
しかし、藪化した土地でも整備保全すれば菜の花畑などとして人も集まり経済効果も生まれる。このような利活用の方法を参加者の目線でとらえて、今後地域の発展につながる知恵と工夫を出してもらいたい。

石神菜の花畑

内　　容：小湊鐵道上総大久保駅（10：20）（主催者挨拶・講師・スタッフ紹介）⇒不動の滝（黒滝）⇒山をくりぬいた水路（先人の知恵技法を知る）⇒素掘りのトンネル⇒イノシシの痕跡と耕作放棄地の現状⇒石神菜の花畑（昼食）⇒養老渓谷駅休憩と足湯⇒里見八犬伝ゆかりの宝林寺⇒養老渓谷駅閉会にて解散（15：30）

廃校になる白鳥小学校

山をくりぬいた水路

美しい花々が迎えてくれる

足　湯

里見八犬伝ゆかりの宝林寺

ま　と　め：人もまばらな田舎道や民家の周辺は手入れされ地域住民は誇りを持って里地を守っていた。経済的な理由だけで人が住まなくなることは悲しい。点在する空家に住む人が戻るのか。耕作放棄田畑の利活用は大きな課題である。
せっかく生まれた観光資源が地元の活性化に確実に効果がなければ、人々の努力は徒労に終わる。確実に効果をあげるにはどのような方法があるのか、模索中である。

石神なの花会　　代表　金子美智男

小さな旅　プラン４
波の伊八に出会う旅　コース

テーマ：**菜の花の小湊鉄道沿線を歩く**
日　　時：平成 24 年 4 月 28 日（土）10 時～16 時
会　　場：飯給駅～里見駅～高滝駅
参加者数：69 名
スタツフ：14 名（おとずれ山の会）
説 明 者：杉田初代（めだか塾）
　　平田常義（高滝神社宮司）

小湊鉄道（飯給駅）

趣　旨　：「アートフェスティバル」と連携した「世界一広いトイレ」や真高寺山門の波の伊八の彫刻を見学し、里山アートと文化・歴史や景観を知る。

真高寺の山門

内　容　：10：20 小湊鉄道飯給駅集合（世界一大きなトイレ）～真高寺（波の伊八）～萱葺きの家～川回し（説明）～里見駅（昼食）～高滝湖（ホトトギスのおやこ説明）～高滝神社（説明）解散 16：00

波の伊八彫刻

見どころ：世界一大きなトイレ「実用はもとよりアートと周囲の景観との調和を織り込んだ」を体験する。真高寺山門では、初代波の伊八の彫刻を見る。現在では残り少ない萱葺の家や、樹形も見事な与一郎桜を見る。里見駅では、地産地消のお弁当や野菜などを販売する「喜働房倶楽部」の活動を知る。高滝湖と高滝神社の歴史などを宮司さんからお聞きする。

道端のニリンソウ

まとめ：五井駅からの乗客のほとんどが、飯給駅で下車し駅前は当コースの 参加者であふれました。駅のすぐ隣の田んぼでは、田植えが始まっていました。のどかな田園風景と線路も駅舎もアートそのものでした。69 名の参加者は、カントウタンポポ、アザミ、ニリンソウなど道端の花に迎えられ、爽やかな風を受け、歴史や養老川の川回しの説明をお聞きし、飯給駅→里見駅→高滝駅までのアートな春を満喫して歩きました。参加者のアンケートから、多くの方が「参加して楽しかった」「大銀杏、与一郎桜・真高寺山門等新しい発見がありました」とありました。

大銀杏

（協力：　喜働房倶楽部、市原ネイチャークラブ、高滝神社、小湊鉄道）
担当：　高橋和靖　風間俊雄　鶴岡清次　加藤賢三　桑波田和子

小さな旅　プラン５

古代市原発見ウォーク国分寺　〝北斗七星〟コース

テ　ー　マ：**古代市原の遺跡と歴史の本当の魅力について**
日　　時：平成 24 年４月 29 日（土）　９時 30 分～１５時
会　　場：国分寺公民館とその周辺
参加者数：50 名
スタッフ：15 名
講　　師：千葉県教育庁文化課保護室
　　主任上席文化財主事　西野 雅人氏
趣　　旨：国分寺台発掘調査後の成果などを講義により再発見する。

祭祀用古墳発掘の位置

内　　容：9:30 市原市役所駐車場集合～上総国分寺の国分尼寺～貝塚、古墳、国分僧寺～国分寺公民館　3 kmを歩いた。国分寺公民館で昼食 13:00 会議室で講義　15:00 終了

上総国分尼寺

国分寺に向かう

国分寺の七重塔の礎石

千葉県教育庁文化課保護室　主任上席文化財主事　西野 雅人氏による「古代市原北斗七星の聖地」の講義では、「国司は中央の重要人物が赴任した。天変地異からの救いを求めて国分寺による異例的な古墳での祭祀が行われた。稲荷台遺跡から出土した「王賜名剣」をはじめ、古代国家の成り立ちや、宗教遺跡として一級の資料があり、市原は特別な場所で東の京(みやこ)であったかも。当時の民の住居はまだ竪穴式ながら、上総は森林や里山や海からの生産性が高い暮らしをしていた。」さらに「日本の古墳時代　大陸にはすでに星信仰が広まっていた。それが日本に伝えられている。飛鳥古墳の天井画・法隆寺曼荼羅などに星座が描かれている。ここ市原はある種パワースポット的な場所であったと思われる。」等々興味が尽きないお話であった。

ま　と　め：里山シンポジウムとしては異色と思われるプログラムだったが、温故知新そのままに貴重な歴史・文化に身を置いてみると見えてくるものがあった。昔から人々の生活と森林や里山は深くつながりをもっている。これからもスターウォッチングが出来て自然がいっぱいの市原をいつまでも守らなければならないと改めて思った。

里山シンポジウム市原実行委員会

小さな旅　プラン６
懐かしいふるさとの味と野鳥さえずる市民の森

素掘りのトンネル

テ　ー　マ：**豊かな自然が残る南総地区の古道を歩く**
日　　時：平成 24 年 5 月 12 日（土）　9 時 30 分～１５時
会　　場：飯給駅～市原市民の森～月崎駅
参加者数：50 名
スタッフ：15 名
講　　師：自然観察　福田　洋先生
趣　　旨：古き良き伝統と現代の共存
　　野鳥さえずる市民の森を散策する
内　　容：小湊鉄道飯給駅集合～旧道（関東ふれあいの道）柿の木台～月崎（永昌寺）～市民の森（昼食）・チェインソーカービング実演見学～月崎駅解散 15：00

永昌寺の山門

市民の森

チェインソーカービング

山菜の天ぷら・猪肉の焼肉・きゃらぶき

いりじゃのこ

とっどせ(鶏雑炊)

太巻き寿司

月崎駅

ま　と　め：福田講師による解説で珍しい植物を観察し、素掘りのトンネルを抜けて永昌寺へ。ご住職のお話を聴き、こいのぼりがたくさん連なって迎えてくれる市民の森に到着。
昼食は、地元の方々もあまりつくらなくたった伝統食の**いりじゃのこ**や**とっどせ**とふるさとの自慢の太巻き寿司。シェフが目の前で揚げる旬の山菜の天ぷらや猪肉の焼肉。特製梅ジュースなどをたっぷり用意。和気あいあいで舌鼓をうった。
伝統食は後継者がなくこのまま消えてしまいそうとか・・・。これらが生まれるにはそれなりの歴史的理由があるのだが、生活様式の変化とともになくなってしまうのだろうか？豊かな自然とその恵みをたっぷり味わった一日だった。

（市原ルネッサンス・ギャラリーいたぶ・安由美会・上古敷谷里山の会・市原米沢の森を考える会）
南市原里山連合　（代表担当者：松本 靖彦）

小さな旅 総括

小湊鉄道株式会社
取締役社長　石川晋平

みなさんこんにちは

今回、非常に有意義な 6 つのプログラムが小湊の沿線で開催され、多くの方が参加されまして、関心の高さを感じました。大変いい会だったと思っております。開催を取り仕切ってこられた皆さん、また企画・運営された地域の皆さんに、感謝の気持ちを申し上げたいと思います。ありがとうございました。

私も二つのプログラムに参加させていただきましたが、地域の新しい発見がありました。一番感じたのは、参加・実行された皆さんが好きでやっていらっしゃる、気持ちが盛り上がっていることを知り、大変いい集まりだと思いました。小湊鉄道の沿線では各地域の活動が盛んであること、自然が豊かなことはもちろんですが、古墳など歴史・文化にも富んでいることを改めて実感いたしました。

昔～今～未来に続く時間軸の「道」と今回小さな旅で歩いた「山道」そして「小湊鉄道」の「鉄の道」の 3 つの道が並行したりかぶさっている、そういう体験を今生きている私たちができるよろこびがここにはあると思っています。

ここで少し会社の自己紹介と地方鉄道の現状を紹介させていただきたいと思います。小湊鉄道は、今年で 95 歳になる大正 6 年生まれの法人ですが、国内には 100 歳くらいになる鉄道が多くあります。地元の発起人によって会社が設立されましたが、運行までに多くの資金がかかるということでなかなか進まなかったようです。当初この鉄道は、天津小湊にある誕生寺に参詣する人を運ぶことを目的に始まったそうですが、安田財閥の創始者安田善次郎さんという方が大変信心深い方だったそうで、採算は難しいが地域の開発の一助になればという思いもあり、最後は根負けして資金を引き受けてくれたことによって事業が動きだしたようです。

大正 14 年五井～里見間、15 年里見～月崎間、昭和 3 年上総中野まで開通。創業当時は機関車 3 両、客車 6 両、貨車 19 両でしたが、今は客車のみ 14 両です。当時は、主に貨車で、これまで養老川で運んでいた木材・山砂利・農産物などの物資を鉄道で運ぶようになったということです。

乗客は、昭和 48 年がピークで年間 433 万人が利用していましたが、その後低下し、平成のバブル崩壊によって加速度的に低下していき現在はピークの 7 割減、135 万人となっています。これは日本全国の地域鉄道でどこも見られるもので、平成 12 年からの 10 年間で 36 路線 635ｋｍが廃止されています。

そのような現状の中、こうした会に参加させていただき、皆さんの関心の高さを実感しました。

いま、会社の会計や企業の価値ものさしは利益額で計られますが、そういう視点で見ると、小湊鉄道は特に小さな旅の舞台である牛久から先は赤字ですから無価値であります。しかし、人間の生活や自然といった里山という視点に立つと、小湊鉄道も里山の一部といえるのではないかではないかなと。ここに小さな旅のパンフレットがありますが、素敵な絵が描かれています。山、人、田、花、そして小湊鉄道も真ん中に描いていただいており、これぞまさに里山です。これら全体で里山というものだと思っておりますが、全体でとらえるという里山の視点で考えますと、企業の活動にも前向きな視点を与えてくれたものと改めて感じました。

百聞は一見にしかずです。6 つのプランどれも楽しく体が喜ぶいい機会になると思います。ぜひ一度、車ではなく列車に乗ってお出かけ下さい。

東海大学付属望洋高等学校 吹奏楽部演奏

司会：これより東海大学付属望洋高等学校吹奏楽部の皆さんに演奏をお願します。その前に、本日この会場の放送機器を担当してくださっています、高橋正美先生と放送部スタッフをご紹介します。浜崎一花さんと宮路純一さんがきょうはここで活躍してくださっていますので少しお話していただきましょう。

浜崎一花:こんにちは､本回は里山シンポジウム in 市原にお越しいただき誠にありがとうございます。本校の学生を代表し御礼申し上げます。私は今回「里山の四季」の DVD のナレーションの仕事をさせていただきました。市原市ちはら台に住んでおり近くに村田川が流れていますが、これまで森林など自然にはあまり興味がありませんでした。しかし、このお仕事をさせていただき、こんなに自然って大切なんだ、すばらしいんだということを学ばせていただきました。植物ってすごいな、一緒に生活することがとても大切なんだ、という感想をもちました。さてこの後昼食ですが、この学校の学食は本当においしいです。私のお勧めはうどんです。安くてお財布にやさしいです。

宮路純一：学食のメニューはたくさん種類がありますが、自分はカレーが好きです
浜崎一花：このあとは吹奏楽部の演奏です。本校の吹奏楽部は有名でたくさんの賞を取っており、聴く人の心を魅了する心に響く演奏です。ぜひお聴き下さい。どうもありがとうございました。

司会：どうもありがとうございました。インタビューも交えて学校の紹介をしていただきました。将来が期待できますね。それでは、吹奏楽部のみなさん、演奏をお願いします。どうぞお入りください。

こんにちは　東海大学付属望洋高等学校吹奏楽部です。
本日は里山シンポジウムの開催まことにおめでとうございます。また、このような場にお招きいただきましてありがとうございます｡本日の会が実りのあるものとなりますよう精いっぱい心を込めて演奏させていただきます。よろしくお願いいたします。本日のステージの司会を務めますのは、私、市原市立五井中学校出身 2 年ペットパート福島あかねと、大網白里町立大網中学校出身 2 年トランペットパート小林美紀でお贈りいたします。よろしくお願いします。まず初めにお聞きいただきますのは、フーテナニーです。アメリカノフォークソングを集めた作品で、カントリーミュージックのメロディーをお楽しみください。作曲はハロルドウォルターズです。指揮は吹奏楽部顧問曽根官九郎です。それではお聴きください。

皆様と楽しんでまいりましたこのステージも次で最後となりました。最後は吹奏楽部のもう一つの顔、合唱をお聞きいただきたいと思います。本日歌います曲はゆずの Hey 和です。この曲は二十歳の献血キャンペーンソングとして歌われました。そしてこの曲を聴き東日本大震災で被災された方たちが勇気づけられたとして話題になりました。本日は私たちの演奏にお付き合いいただきまして誠にありがとうございました。それでは作詞作曲・北川悠仁でゆずの Hey 和です。どうぞ。

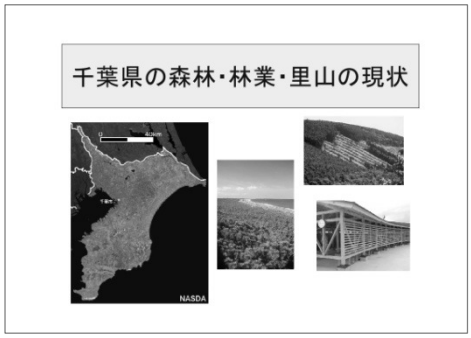
司会:素晴らしい演奏を本当にありがとうございます。もう声が出ないくらい感動してしまいました。生徒さんの力に私たちはまた元気をいただいたように思います。技術的な高さだけでなくそのエネルギーに、日本の将来明るいぞと皆さん思われたので感じられたのではないでしょうか。里山シンポジウムをこの学校で開催させていただきほんとうにかったと思いました。もう一度大きな拍手をお願いします。

千葉県からの報告

千葉県農林水産部森林課森林づくり推進室長　　武井 良彦

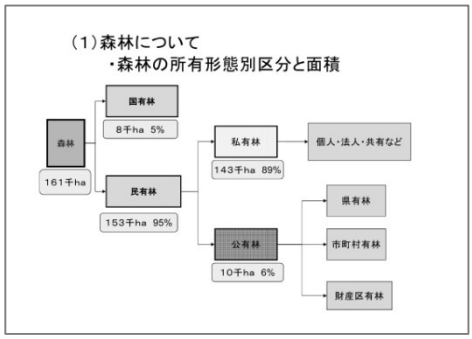
1.ここからは、パワーポイントにより、千葉県の森林・林業・里山の現状をお話ししたいと思います。

役所の説明で数字が多いことは、すみません。



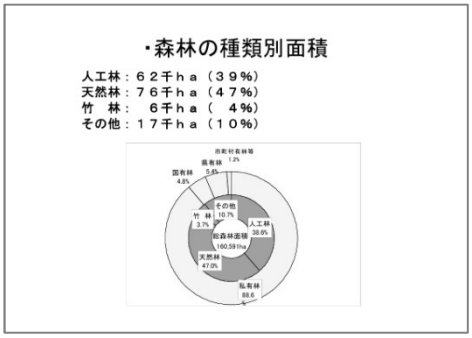
2.はじめは、千葉県の森林面積ですが、161千ヘクタールです。ほとんどが、民有林です。

千葉県の場合、森林と農地と宅地がほぼ1／3です。



3.本県の県土515千haのうち、161千haが森林でその率は31％（森林率と言います）、森林率の全国平均は67％ですが、本県は全国最下位です。森林は貴重な存在です。

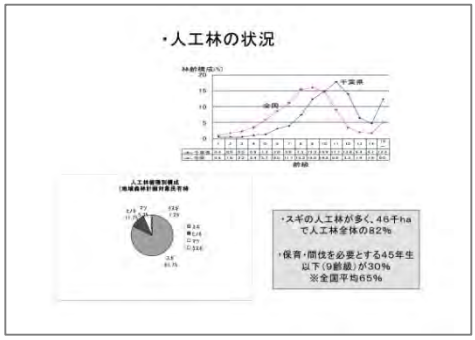
また、森林の内訳は、人工林（スギ・ヒノキ・マツ）が39％、天然林が47％、竹林が4％です。なお、竹林面積は、全国で第7位、関東で第1位となっています。



4.人工林の状況です。

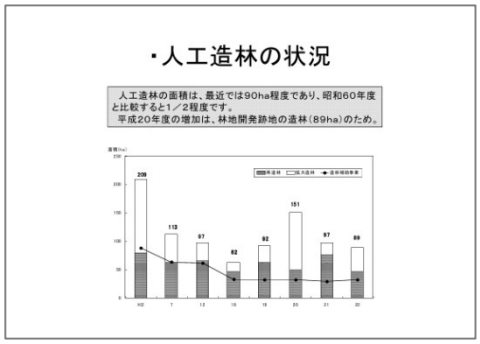
ここで、林業用語であります、「齢級」について説明させていただきます。このグラフから、本県の森林は、51年から55年生の11齢級（1齢級は5年です。）の森林がピークとなり、全国平均の9齢級より成熟度が進んでいる状況であります。

下の円グラフは、人工林の樹種別の割合ですが、人工林の82％がスギとなっています。



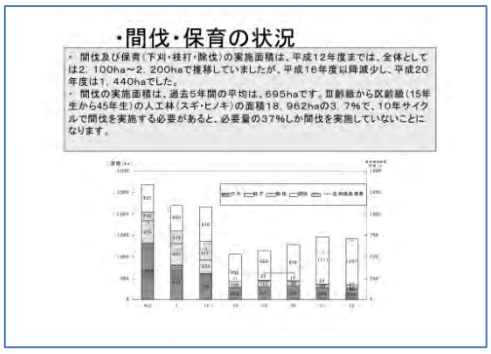
5.伐採の後の人工造林の状況ですが、近年は、90ha程度で推移しています。

なお、平成20年度は開発跡地の植林が増えたため、拡大造林が増加しています。

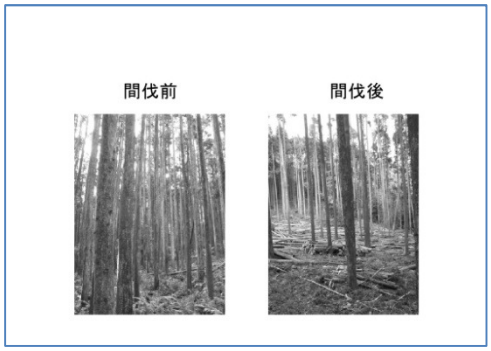


6.間伐等の保育作業の実施状況ですが、

スライドのとおり



7.写真は、荒廃したスギ林と、間伐を行った森林（嶺岡県有林）です。



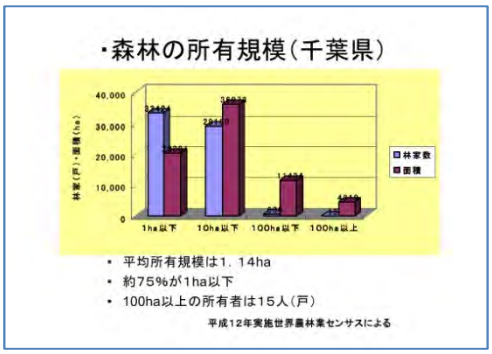
8.スライドのとおり

（2） 林業について

＜現状＞
・零細所有者が多い
・木材価格の低迷等により、採算性が悪化
・担い手の不足
＜課題＞
・保育・間伐等の森林整備の推進
・木材生産コストの低減
・木材需要の拡大
・担い手の育成
＜目指す方向＞
・間伐等の森林整備を集約
・路網整備、高性能林業機械の導入
・公共施設等への木材利用

9.零細所有者が多いと言う状況です。

森林所有者の約75%が1ha以下の所有であり、平均所有規模は、1．14haとなっています。

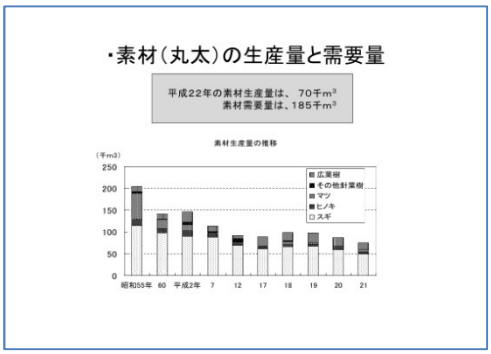


10.本県における丸太の生産量と製材工場等で利用する丸太の量です。

平成22年の素材生産量は、70千m3。需要量は185千m3であり、国産材と輸入材は半々です。

なお、外材の入荷量は減少しています。

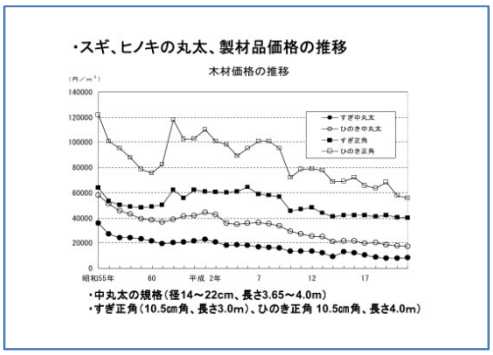
近年は、集成材（断面寸法の小さい木材を接着 剤で再構成して作られる木質材料）が主流となったことから、昭和55年に県内の製材工場は544工場であったものが、平成22年は197工場まで激減しています。



11.スギ、ヒノキの価格の推移です。

いずれも昭和55年をピークに木材価格の低迷が続いています。平成22年の価格は、スギ中丸太が7000円/m3、ヒノキ中丸太が14500円/m3。製材品は、すぎ正角が40200円/m3、ヒノキ正角は57100円/m3 です。

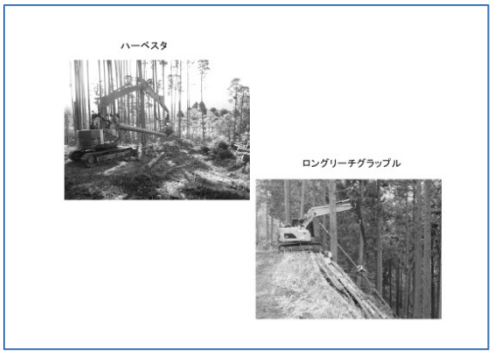
なお、昭和40年の銀行の初任給が2万5千円であり、平成16年が17万4千円です。いかに木材の価格が下がってしまったのか。中丸太（経14～30cm）。その前後は、小丸太、大丸太。正角（しょうかく）と呼び、一辺7．5cm以上の角材。



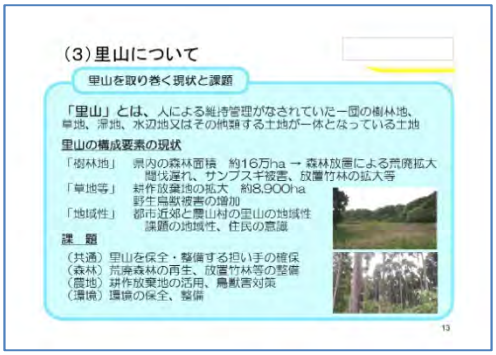
12.高性能林業機械による施業状況です。

・高齢化、新規就業者の増加、安全、路網の必要性

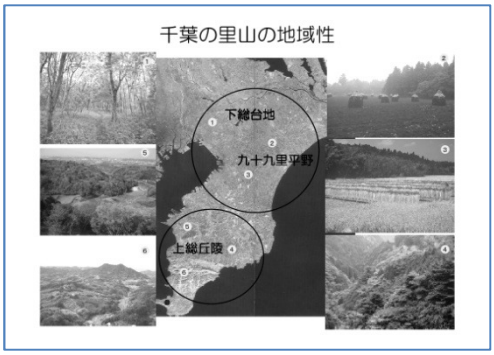
・作業状況の説明



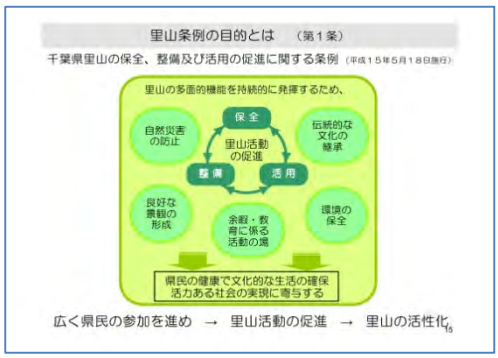
13.スライドのとおり



14. 里山の地域性

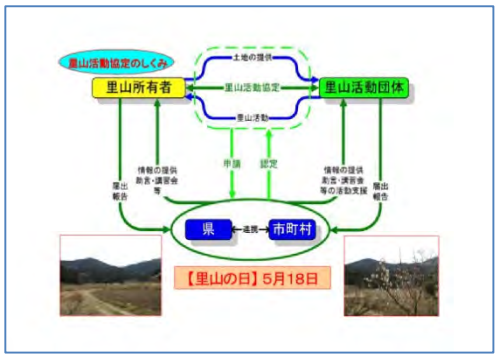


15.千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例（里山条例）に基づき、里山活動協定の締結を促進し、県民や企業等の多様な主体が参加・協働する 里山づくりを推進することが目的です。



16.里山条例に基づく里山活動協定の締結の仕組みです。森林所有者と里山活動団体が協定を締結して、知事がその協定を認定し、情報の提供、助言、講習会等の活動を支援するものです。

平成20年度までに100協定を目標としました。平成23年8月末で、119協定（80団体）を認定しています。



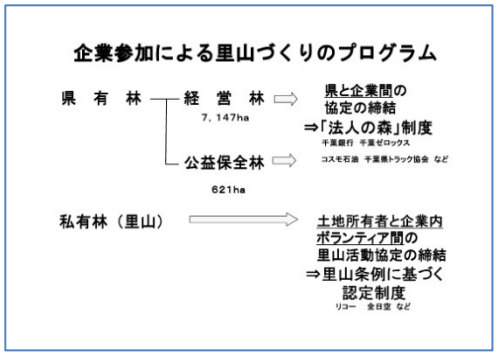
17.県内一円で協定が結ばれています。認定面積は、169ha となります。ありがとうございます。

18.順次増加しています。

19.現在、県では、企業参加の里山づくりのプログラムも用意しています。

特に、県有林の中では、「法人の森」制度により、千葉銀行、千葉ゼロクッス、コスモ石油、千葉県トラック協会等が活動しています。

もちろん私有林でも活動されています。



市原市からの報告

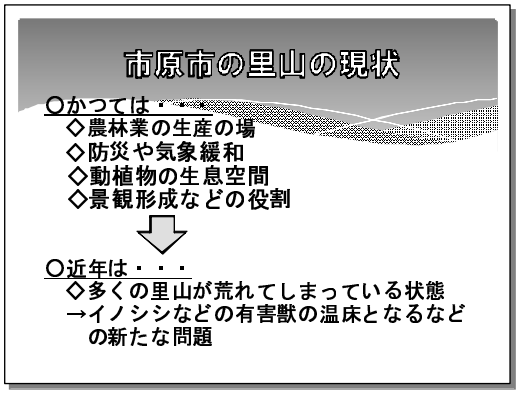
市原市経済部農林業振興課 課長　桐谷芳孝

スライド 1

市原市経済部農林業振興課の課長の桐谷と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私からは、「里山保全に向けた市原市の取組み」ということで、本市の里山に関する現状や市が行っている取組みなどについて、簡単にお話させていただきたいと思います。

スライド 2

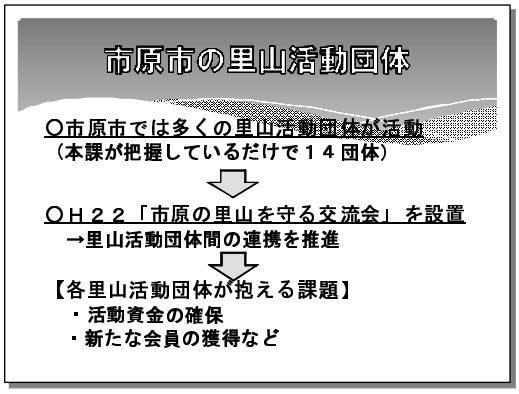


まず、市原市の里山の現状についてお話します。

里山は、かつて農林業の生産の場であると同時に、防災や気象緩和、多様な動植物の生息空間、景観形成などの役割を果たしてきました。

近年は、私たちの生活様式の変化に伴い、里山との関わりが薄れてしまったことから、多くの里山が荒れてしまっている状態で、これは市原市においても例外ではありません。荒廃した里山は、イノシシなどの有害獣の温床となり周辺農地で被害が発生するなど新たな問題も生じています。

スライド 3

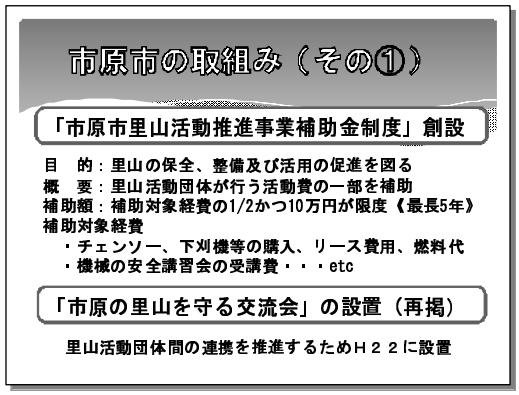


次に、市原市の里山活動団体についてお話します。

市原市には多くの（本課が把握しているだけで１４団体）里山活動団体の方が活動されており、里山保全に向けて取り組まれています。

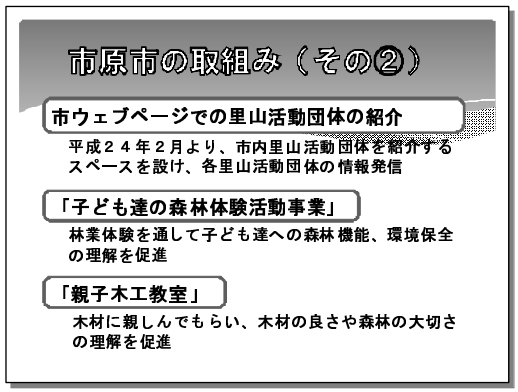
しかしながら、各団体個々での活動は活発であるものの、団体相互の連携が希薄であるという課題がありました。このようなことから、里山活動団体間の相互連携、市との協働による里山保全を推進するため、平成２２年度に「市原の里山を守る交流会」を設置いたしました。同会において課題の抽出などを行った結果、各里山活動団体が抱える課題としては、活動資金の確保や新たな会員の獲得に苦慮していることがわかりました。

スライド 4



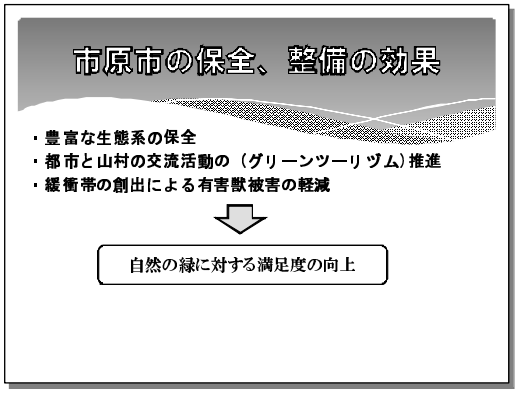
次に、市原市の具体的な取組みについてお話します。このことを踏まえ、まず市では、平成２３年１１月に里山活動団体の方を支援すべく「市原市里山活動推進事業補助金制度」を創設しました。
この制度は、里山の保全、整備及び活用の促進を図るため、団体が市内で行う里山活動に対して支援を行うものです。その内容は、里山の整備に必要なチェーンソーなどの機械やなた、鎌などの道具の購入、機械の燃 料代、里山における自然観察会の開催に要する経費などを対象としており、その経費の１／２、上 限１０万円の補助となっています。本補助制度につきましては、昨年度２団体にご活用いただき、本年度は、既に７団体からの申請を予定しているところです。なお、市内の里山活動団体の方の中には、本制度をご 活用いただきながら市が所有する里山についても保全 活動をしていただいているところです。もうひとつの「市原の里山を守る交流会」の設置については、さきほどお話したとおりです。

スライド 5



その他の取組みといたしまして、平成２４年２月には、市ウェブページ内に市内里山活動団体を紹介するスペースを設け、各里山活動団体の情報発信をさせていただくことにより、新規の会員獲得などのお手伝いもさせていただいています。 このほかにも、里山の持つ景観形成、森林の多面的機能について、自ら林業体験をすることにより、森林機能、環境保全の総合的な理解を促すことを目的とした 「子ども達の森林体験活動事業」や木材に親しんでもらい木材の良さや森林の大切さを理解してもらうことなどを目的とした「親子木工教室」を実施するなど里山や林業及び木材の大切さを知っていただく啓発事業にも取り組んでいるところです。

スライド 6



市としましては、里山の保全、整備を行うことで、良好な状態となった里山は、有害獣の生息地と農地との緩衝帯の役割を果たし、有害獣の被害を軽減させるとともに豊富な生態系の保全につながるものと考えます。また、里山の魅力を発信しながら活用していくことが都市と山村交流いわばグリーンツーリズムの場となる可能性も秘めているものと考えており、今後も里山の保全、整備及び活用を推進すべく、皆様にご意見を伺いながら効果的な施策を積極的に実施していきたいと 考えています。そして、市民の皆様の「自然の緑に対する満足度の向上」につながればと考えています。

市原市経済部農林業振興課
E-mail　nougyoushinkou@city.ichihara.chiba.jp<mailto:nougyoushinkou@city.ichihara.chiba.jp>

基 調 講 演

越後妻有　大地の芸術祭の里

北川フラム

主に新潟の話からです。

新しいトンネルをつくっていたら､ガスがたまって大爆発。その未完成のトンネルが底を這っている場所の話です。日本のいろんな地域の中で高速、あるいは高規格道路が入っていない場所を探すのは難しいのですが、そういうのがない場所です。大豪雪地帯で、多いところでは年間８回くらいの雪下ろしが必要な場所の話です。去年は大豪雪のあと、3 月 12 日に、3.11 に連動して長野県北部地震があった場所です。4 月 29-30 日頃には大水害にも見舞われました。

そういう山の中でも、これまでにいろんな開発をやっています。でも、去年の水害で傷んだのは、ほとんどがこの数十年の中で、無理をして道をつくったような所です。トンネルもなんとか高規格道路ということで頑張ったんです。

2004 年と 2005 年の中越大震災と中越沖地震でやられたのは、ほとんど近年に計画的につくられた棚田です。先祖が培ってきた棚田は、地下水脈とか、大げさに言えばモグラ道まで読み込んでできてきた有機的な形で、それらはほぼ全部残っています。戦後の計画的に整備された棚田は相当やられた。それで、いろいろな問題が一気に押し寄せている場所の話です。

参考までに･･、越後妻有という場所は地図にありません。平成の合併ですが、国・県の意図は、十日町を母都市として一市四町一村で合併させようということでした。この広域で一つの柔らかなプロジェクト事業を始めようということでしたが、事業の名前だけで大混乱になって、なかなかまとまりませんでした。

新潟県全体の昔の名前が越後ですので、越後という名前を残しながら、平安時代に妻有という荘園があったのでその名前を付けて･･、何とか一市四町一村の７６０平方キロメートル、東京２３区よりちょっと広い広大な土地でプロジェクトをやることになりました。この妻有という名前は、新潟の中の「とどのつまり」という言葉からきている当て字ではないかと言われています。

私は新潟県の高田の生まれです。小学生の頃は、このあたりは義務教育免除の地域で、うらやましいなあと思っていました。つまり、冬は学校に行けない。家から学校に行くのが不可能な地域です。去年の１月もそうでしたが、道路が雪で埋まって、ヘリコプターで食料などの物資を入れたところです。人口が３万人以上いる場所としては、世界で一番雪が深い場所のようです。

山梨県の甲武信ヶ岳から流れる川が、長野を走っているときは千曲川で、新潟になって信濃川になります。その信濃川ですが、日本で一番長いと言われていますが、重要なのは日本で最大の土砂を流しているということです。それで、土壌は豊かで･･、時には氾濫します。山地で平らな場所がない。紅葉落葉樹の林があり、典型的なものがブナ林です。鮭の上る川があって、ドングリその他が落ちてくる林があります。豪雪地ですから、敵から守りやすい、あるいは動物を捕まえやすい所です。

動物被害は全国的な問題のようですが、ここでも深刻です。瀬戸内海では猪・鹿・蝶の花札の

絵柄を猪・鹿・猿に変えてやろうと言うぐらいすごい。猪が島に泳いで渡りだして大変なことになっています。そういった動物の問題がこの地域にもある。もちろん自然環境との関わりの問題ですから、自然に直接対応していた時代はそれなりに豊で、それなりに助け合って生きていた。

縄文時代には、ここの河岸段丘で火焔型土器といわれる土器がつくられていました。豊かな土、豊かな水‥、そういう中で、日本人独特の何でも神様だというような畏敬の心があって、なおかつ楽しいことが行われていた所です。

ここは越後です。今は車で２時間ちょっとですが、相当山奥です。近代になって若い人たちの労働力が都市に出ていく。あるいは学校に行くために土地を離れる。これを地元の人たちは、寂しい気持ちを抑え、むしろ喜んで、暖かくあるいは激励して送り出してきた。

ところが、日本の国が農業を基本的に捨てた段階から、この地域は相当厳しくなった。山の峠、山の上の集落で頑張って田んぼをつくってきたのに、そういうところでの田んぼはやめましょう…、山の上までやるなんてもってのほか…、それだけでも効率が悪いのに道はどうするの‥、その上に除雪なんて…、冬の間はやっていられないでしょう、というようなことで、こういう棚田はやめましょう…、山の中にある集落もやめましょう…、という方向が日本の中で出てきた。これで相当みんな厳しくなって、自分のご先祖さんをどうする、お墓をどうする。

これだけ密度をこめてやってきた集落、あるいは道、そういった丹精込めたまさに家庭のような…、家と庭という字で家庭ですが、まさに家と庭ということを一生懸命、田んぼをやりながらやってきたものが無くなるということで、相当厳しくなってしまった。

この地域の山間部の人たちの２割ぐらいは、自分の息子が…もう１度地元に帰ってくるのは、自分の葬式の時だろうと、言うぐらいに思っています。一方で、耕作放棄の田んぼもたくさんあり、調べても、なかなか持ち主をたどれません。うまく成功した人たちはいいが、今、何をやっているかをはっきり言えない人たちも多い。そういう人たちは追跡不可能で、これまでの棚田を活かしていくことも難しい。そのようにすごく寂しい、未来のことは考えにくい。

最近はもっと追い打ちがかかり、とにかく直接やめればお金を払うというふうな制度がいろいろな形で出てきた。これはどうしようもない。夕張と同じです。私たちは、私利私欲で生きている。ですから、お金を出されたら、みんなもらうのは当たり前です。もらった瞬間に誇りも失う。ということで、相当厳しくなっている。高地で先祖代々農業をやってきた人たちにとって、自分の地域を離れなければいけないのは厳しい。すごい洪水とか津波がやって来て、それで離れなければいけないという話ではないのです。

そこで、この地域が、特におじいちゃん、おばあちゃんが、展望を持てるまではないにしろ、楽しいと思えるような、元気が出るような、幸せを感じることをするには何をしたらよいか。ということを考えてきました。すごく不思議な話ですが、それが、人がたくさんいらっしゃる観光と極めて密接に結びつく、というのが今日の話です。

棚田があります。この地域のもう１つの特徴は、ほとんどの場所は「せがい」と言っているやり方で田んぼをつくってきました。川が蛇行しています。信濃川の支流ですが、地形の弱いところを蛇行して流れています。蛇行している所をショーットカットして、下の方でつなげると、蛇行部分が田んぼに変わります(房総で言う「川廻し」)。いたるところ「せがい」だらけです。この「せがい」と棚田で米をつくってきました。この写真は峠の棚田といいますが、これが典型的な棚田です。

新潟はご存知のように明治になった時に１８０万人が暮らしていて、日本で一番人口が多いと

ころでした。当時は、日本の約６％強の人口が新潟にいたのです。

何で、こんなに新潟に人たいたのか。湿度が高いというか、夏は高温です。日本の海は太平洋側も日本海側も暖流と寒流がぶつかっています。房総はその恩恵を特に受けているわけで、そういう意味で新潟と裏表ですが、そういう恩恵を受けている場所です。新潟の方はそれに季節風が入ってきて、夏の高温高湿、そして冬の大豪雪になっているわけです。気温が高いという以外に米作りにはあまりいいことがない。まず、日照時間は１００日がぎりぎり。さらに、洪水でびちゃびちゃ。更に山だらけ。本当に越後妻有は山だらけです。

そういう中でこれだけの人口を養うためにどうしたか。越後という名前に表されている通り、今では中央は東京ですが、昔の中央は関西、近畿でした。そこから見て、越しというのは化外の土地、つまり人が行くような場所ではない。しかも越しの国のまた奥が越後です。そういう場所には政治的、経済的あるいは宗教的、文化的にその都市、中央にいられない人たち、あるいは追い出された人たちが、集まってきました。越後では、先祖がそのような人たちですから自分はえらいと言っていてもしょうがないわけで、こんな雪深いところで生活せざるを得なかったし、みんな受け入れてきたわけです。

この受け入れた人たちが食べるために、必死の努力で米をつくってきた。これは日本全国ある意味で同じですが、越後は典型的な場所です。つまり、ワーキングシェアを徹底的にやってきた所です。これがすごく重要なんです。ワーキングシェアというと大げさですが、皆さんブータンの話はご存知でしょう。

僕はついさっきまでバンクラディッシュから帰国しました。バングラディシュは世界最貧国といわれているんですが、とにかく芸術文化あるいは生活美術というか、生活でもいろんなことを楽しんでやっている国民が圧倒的に多い所です。最貧国と言われながら飢えが無い。それなりに物貰いなどしているが、とにかく元気だ。なぜかというと、みんながわずかでありながら、仕事を回し合っているんです。これにはびっくりしました。越後もいろいろな人がやってくる‥、田んぼなんかやったことがない人でも､｢何とかやっていれば慣れてくる｣と受け入れてきた所です。

皆さんご存知の山越村。2004 年の中越の大震災で壊滅的になった村です。約 30 軒のうち 20 軒が戻った集落もあって、平均で６割から７割の人が戻ってきています。そこが今になって少しずつ方針を変えてきました。

ずっと湯水のようにお金が村に流れてきた。だから反対はできない。有難いけれども、どうもこれまでやってきたことって、何だったんだ。日本のスタンダードに合わせてきただけじゃないか。それでは上手くいくわけがない。ということで少しずつ変わってきました。もともと山越もいろいろな人たちが来るのを受け入れながらやって所です。そういうことをまた考え始めた。この越後妻有もそうなればいいんですが、そこまではなかなかいかない。

この写真の棚田についてちょっと説明しますが､日本でも有数の美しい棚田といわれています。峠という山のてっぺんの集落から、下を見下ろした棚田です。これは今もほとんど変わっていませんが、この棚田は中越の大震災で、ほとんどやられなかった。見ての通り有機的な形は地下水脈その他全部長い時間をかけながらできてきた形なのです。これを今も守っているのは、どうしてかということを聞いた人がきっかけで､今から25年ぐらい前に､集落の人たちが400年ぶりに、自分たちはどこから来たどういう人間たちかということを明らかにしたそうです。

織田信長の時代ですが、尾張、三河、伊勢の一向宗の門徒たちが皆さんご存知のように越前、越中と転々として最後、富山で壊滅的な打撃をこうむって、ほとんど全滅しました。僅かな人た

ちがあちこちと逃げ回って、この大豪雪地帯に入ってきました。誰も来ないような山のてっぺんで生きついて、自分たちは一向宗、浄土真宗の門徒だということを言わないで、必死に山の上から田んぼをつくってきたのです。越後妻有とは大きくいってそういう場所だと理解してください。

そういう中でアートをやろうと‥。六市町村の議員の先生方が、その当時は100人ほどおられ、全員が反対。アートが役に立つわけがない、アートでうまくいった例があったら、教えてくれ、と散々だった。ある議員の先生が、「あんたが反対を押し切ってやる執念は見上げたものだが、やられてはこまる」「教育上、悪い」なんて言うんですね。「どうしてでしょうか」と聞くと、「赤とんぼは垂直に飛ばない。そういうことを子どもに教えちゃ困る。」っていうんです。だけど私は「しめた」と思いました。この方は、一生懸命考えようとしています。その議員の先生は、初めは大反対しましたが、できあがったら自分が面白いと思ったんです。それはそうでしょう。ここへやって来たアーティスト、作家たちは、普段は○・△・□みたいな幾何学的な形しかやらない人たちですが、越後妻有に来て、緑の梢の奥に広がる青い空には赤とんぼが似合うと思って作品つくったのです。だからいいんです。シンボリックで、しかもこの地域の良さを伝えてくれている。

その議員の先生は面白いと思ったが、あれだけ反対した手前、反対したり理由を述べなければいけないと思ったらしい。後で聞くと、必死に考えて、赤とんぼは垂直に飛ばないということを発見して、これを理由に反対したことにしようと思ったらしい。他愛のない話がエピソードとして伝えられています。

これはイリヤ・カバコフというロシアのアーティストの有名になった作品ですが、これを少し皆さんに丁寧にご説明します。どうして里山にアートが来たのか。それがいろいろな人たちを元気にさせたのか、という非常いに良い例になります。

この田んぼ、みなさんから見て、みなさんがこの場所におられると考えてみてください。そこからこの田んぼまで約50メートルあります。ほんとにこのステージぐらいの棚田が５段ぐらいになっているのを皆さん見ている。そういうふうに想像してください。向こうの方には約３ｍの彫刻があぜ道においてある。見ての通り、古い農作業ですが、右下から田起こし、そして、種まき、黄色の一番上が草刈りです。その下が刈り入れ、一番左の黄色がそれを町に運んでいる、そういったものが棚田に順番においてあるわけです。皆さんの目の前に横３ｍ、縦２ｍのフレームがあると考えてください。このフレームにワイヤーが垂れ下がっていて、ぴんと張ってあるわけですが、そこに文字が貼られている。

これは写真だから少しずれて見えますが、真ん中に立つとこの皆さんは文字越しにこの彫刻を見ることができる。いわば、立体絵本になっているんです。たとえば、「四月　輝く太陽。雪は消え、湿っぽい霞が空中を充たす。ずんぐりした馬が重い耕作用の鋤を懸命に引っ張る。」というような美しい詩が貼ってある。こういうものをこの地域でつくった。

福島さんという人は、2000年にここの田んぼをやめることにしました。大腿骨を骨折してもうやれないのでやめるということを聞いて、ではそこの田んぼを使わせてくださいと言ったら、断わられました。温和な方ですが、先祖代々頑張ってきた棚田です。いくらやめるとはいえ、何かそこによくわからない黄色、青、赤、○・△・□見たいな現代美術といわれるものがおかれたらたまらないということで、やんわりと断られました。それから、イリヤ・カバコフというアーティスト、そしてこれを手助けした「こへび隊」‥、高校生ぐらいから70歳ぐらいのおじいちゃんがおられるのですが、そういう人たちが、昔の農作業はどうだったか、どういう材料を使ったらいいかということをいろいろ勉強して、イリヤ・カバコフさんが福島さんにこういうことをやり

たいんだということをご説明した。それで、福島さんは「やってください」と、いうことを言い出しました。ロシアの農民と日本の農業をやってきた人達との気持ちがつながったんですね。

イリヤ・カバコフは、日照も足りない大豪雪地、しかも　跡を継ぐ人たちもいない中で、頑張っている農業ということをすごいなあと思って、それを何とか表したいと思いました。それが動機ですから、それは人の心を打つ。

アーティストが勝手なことを思っていたら、それだけではなかなか伝わらない。アーティストは勝手なことを思うのですが、ここで約 1500 年の長い間農業をやってこられた人への敬意、そういったことを、自分の仕事を通して表したいとイリヤ・カバコフは思ったわけです。それは丁寧にやっていけば伝わるのです。イリヤ・カバコフの作品が成立するわけです。それがアートの働きです。

整理します。地元の人たちは、これは大変だ。政府は何をやってんだ。後継ぎもいない、人もいなくなってきた。それでも頑張ってやってきていることをイリヤ・カバコフがよそからやってきて‥、アーティストはものを発見する力が多少有ります‥、これはすごいことだと、ほんとにそういうご先祖さんがいて、働く人たちがいて、今の私たちが生きている。それが本当に大切だったんだということを言わずしてどうしようということで、この立体絵本のような仕掛けを考えたのです。新しい場所の発見です。

その地域のことを考え、そこの人たちがどういう生活をしてきたかを考え、いろいろ学び、地域の人たちに一緒のものをつくってもらうためにいろいろお話をする。そこで地元の人たちの気持ちが開かれていくわけです。

先ほど、この地域は「とどの詰まり」という言い方をしました。この地域の言葉は鹿児島県と同じように閉鎖系の言語です。つまり、コミュニケーションを取るための言語というよりも、よその人がその地域に来たら、よそ者だとわかるための言語です。よく言いますでしょ。徳川政権が、鹿児島にいくら密偵をやっても、ちょっとした時にやはりわかってしまう。そういう言葉の形態で、他者を排除することによって、やっと　生きてきた場所です。その人たちに風穴があきました。

一生懸命にアーティストは仕事をします。皆さんもご存じのように　農作業をやっている人たちには、休みというのはほとんどありませんが、それでもお年寄りは何かあるたびに仕事の現場にやって来る。

新潟では平均で５人ぐらい雪の事故で亡くなります。夕飯食べていて、「じいちゃんいないな」というと、「それ行け」となります。ドアを開けるとその横の縁側に雪がどさっと落ちて、おじいちゃんがその中に亡くなっている。何かあれば働いていないと気が済まないという人たちで、「じいちゃん出るな」と言っていても、やはり雪があると、なんとかしないと、と思ってしまう。ほんとによく働きます。そんな人たちが、アーティストやサポーターたちが一生懸命働いているのを見ると、手を貸す。お母さんたちはお茶を入れたりしてくれる。その瞬間にその作品は、一人イリヤ・カバコフの作品ではなくて、地元の人たちの作品になります。

アートというのは、写真を見ても、一向に判りません。僕が説明してもあまりわからないかもしれない。しかし、行けばものすごくわかります。立体的に風景というか、そういうものを体感できます。そういう中に人がいらっしゃる。口コミであそこ面白いよ、と言ってくれる。そうすると、地元のおじいちゃん、おばあちゃんが出て来て、あのアーティストはこうやっていたんだよとか、自分たちの集落はこういうふうにできた、いう話を始める。すごくうれしそうにです。

地域の資源の発見。アートをつくっていくための交渉、勉強。地元の人が手伝いアートが完成する。次にいろんな人たちが観光で来るわけです。語っている時の喜び。越後妻有に来られた人の多くは、おじいちゃん、おばあちゃんが元気だと言います。

地元の人たちの幸せを感じる観光、それが里山でのアートの働きです。越後妻有では、３年に１回、２０００年から４回の大地の芸術祭をやってきました。今年の４月２９日から第５回目です。だいたい、やるたびに3割くらいの新しい人たちが来ます。７割はリピーターです。こんなにいろいろな人たちが毎回来てくれる場所はあまりありません。３年に１回だけでなくて、田植え、草刈り、あるいは、冬の雪遊び、あるいは秋の収穫のお祭りにも、いろいろな人たちが来るようになった。そういうことで、越後妻有のおじいちゃん、おばあちゃんが元気になっています。私たちは、農業は分からない、あるいは、この地域をどうしたらいいのかあまりよくわからないけど、じいちゃん、ばあちゃんの笑顔をみようということにつきます。それを地元の資源を発掘していきながらやろうということです。

これは信濃川の奥の支流です。堤が見えます。そこに大正時代以前にあった信濃川支流の蛇行する流れに沿って５メートルごとにポールを 700 本立て、3.5 キロにわたって、信濃川の昔の流れを再現しました。これをやるときも 28 人の地元の地権者は、最初は反対でした。こんな田んぼの場所にポールを立てるなんて冗談じゃないと言っていましたが、結局は納得をしました。この黄色の旗は、地元の人たちの意見によってできました。感動しました。

初めは反対して、やがてしぶしぶ、まぁやるかと思っている。僕ら、この黄色の棒を一生懸命運びました。そういう中で彼らがいろいろ言い出したのがすごいわけです。この河川敷、元河川敷には風がいろいろ吹きます。風の向きが頻繁に変わるということで、「旗を立てたらよかんべ」と言い出したのが地元の人たちです。まさに旗が揺らめくこの場所が、どういう場所になるかをよく教えてくれました。

2003 年、同じ圃場整備をした河川敷で、高さ 30 メートル、横 140 メートルの巨大な足場をつくりました。これを見ると信濃川はぐんぐん大地をえぐっている、そして、だんだん低くなっている。この過程が分かります。いろいろな時代がります。

2009 年には、もともとの自然堤防がここにありましたということを掘ってお見せしました。これがアートかどうかはよくわかりません。だけど、これをやることを見た子どもたちは、自分たちの住んでいる場所はこういうふうにできてきたということをある体感を持って知ることができます。

最初はなかなか理解ができなかった大岩オスカールさんというブラジル３世の方です。彼は非常に賢かった。もうつくらせてもらえないと切羽詰った彼が考えた手は、ここの田んぼの持ち主の家族の人たちの肖像彫刻をカカシとして田んぼに置くことでした。そこまでやってくれるんなら文句は言えません。こういうカカシはいくつかございます。毎年、親しまれています。

看板を立てる公共工事があります。空き地に公園をつくりたいという話があって、看板と公園の２つを一緒にしたものをつくらせてくださいと言いました。松之山という町の大きな施設、温泉、地域の祭りなどの案内看板です。公園ですから、みんながここに上がれるようにしました。初め松之山の人たちは、この計画に反対でした。「こんな訳の分からない物をつくって」と言っていたんです。ところが、この文字は浅葉克己さんというアーティストのデザインですが、そのうちみんないろいろなことを浅葉さんに頼むようになりました。浅葉さんは米１俵でデザインをやってあげている。数百万円の価値を生み出すアーティストですが、最初にこの仕事をやる時、米

１俵で頼んだので、それからは何でも米１俵でやっています。このようにアーティスト、デザイナー、建築家と、いろいろな専門家が地元とつながるようになりました。

今、越後妻有は世界的に大きな可能性を持った場所といわれています。それは、長い歴史の里山、田んぼ、集落、庭、そういったものがもっている力、そこにアートが関わったからです。

美術館の建物や内部を想像してください。つまり、今までみなさんが考えられているアートが美術館のアートだとすると、例えば彫刻は、市原でも、東京でも、ワシントンでも美術館は同じように、作品が華やかに見える空間に展示されます。

ところが越後妻有でやっていることは、作品があることによって、周りの風景や場所が際立つということです。どれがいいアートかどうかではありません。今までは都市の時代で、アートは個性の輝きだ、みんな頑張ればいいと思っていただけではなく、「これだけ地球環境が危ない」、「正直の倫理性も危ない」、「地球の中で明らかに人類はもう落ち目だ。という中で、美術というのは、昔から人類のものすごい友達でした。この美術が今、自分が目立てばいいということから、大きく舵を切り始めています。

皆さんが、この 100 年の間に見てこられた美術が、数十年後にガラッと変わります。それが越後妻有で始まっています。つまり、人がいて初めて、あるいは地球があって初めての美術なのです。地球、社会、人類が危機に陥っているときに、美術は自分だけが目立てばいいというふうなことは言っていられないのです。今は私たちの足元が危ない。足元の可能性を見て行きたいという時に、　アートは先ほどのイリヤ・カバコフの作品にあったように　この土地を明らかにするために働きだそうとしたということです。

どのアートがいいとか悪いとかでは全くありません。どういうアートもいいと思うのです。１つのアートが今、地域の危なくなっている土地、そう言ったものを明らかにする。土地に流れてきた時間を明らかにするために美術が働き出した。そういうアートの活動が今出てきたということです。

屋外にあるアートは今まで見てきました。もう１つ室内のアートを見ていただきます。ちょっとご説明しますと、これは廃校になった小学校の講堂兼体育館です。この会場６分の１ぐらいですね。そのぐらいの大きさの講堂兼体育館、その右側は校長先生の部屋や職員室とかがあって、２階は教室です。　１・2 年生、３・４年生、５・６年生の部屋が３つある。左側に窓ガラスがりますが、桟が走っているのが見えるでしょう。あれは雪囲いの桟で、窓ガラスが割れないようになっているのです。この校舎の外に 8m50cm のポールが立っています。それは昭和 39 年の大豪雪の時の積雪の記録です。8m50cm も雪が積もるということは、それに約４倍かけてください。35m も雪が降ったということです。

この小学校の名前は、中里村立清津小学校土倉分校。山奥です。その廃校になった場所で、北山善夫さんという岐阜県のアーティストが、一冬をかけて、この赤とか、白・黄色・黒という細かい作品をつくっています。一冬そこに居ますから、疲れます。

この学校はたたまなければいけなくなっていた。維持費がものすごくかかりるし、危ない。もう無くなっちゃいましたが、北山さんは亡くなる寸前の学校を借りたわけです。そして、やがて捨てられ燃やされるスナップ写真、残された文集、卒業式当日の送辞、答辞など、こういったものを学校中に再展示しました。これは僕にとって震える感動だったんです。だいたいできたころに私はこの学校に見に行きました。誰もいない。その中で本当に驚いたのは、子どもたちのざわめきが聞こえ、子どもたちが動きまわっているのが見えました。既視感ですね。本当に過去の時

間があらわれたというしかない。私が見たものは、ここで遊んだ子供たち、その子どもたちを見守った集落の人たち、いろいろ大変な中で育ててきた親御さんたち、あるいはおじいちゃん、おばあちゃん、そういう人たちの時間、記憶、思い出、喜怒哀楽‥、そういったものがここの中に見えちゃったわけです。

今までアートというのは、空間的な芸術だと言われてきました。ところが、この場所の厳しい条件、そして今はみんないなくならざるを得ない。こういう中ではじめて、アートというものは時間をさかのぼることができる。記憶につながることができるわけです。

もう１つ、典型的なのはこれです。クリスチャン・ボルタンスキーという、世界のトップスターのアーティストですが、今も使われている１ha の畑にピーンとワイヤーを張りました。そして家の中に残されていたもう使われなくなったエプロン、あるいはワイシャツ‥、そういったものを持ってきてもらって、等間隔に貼りました。それが写真で見ているように風に揺らめいて様は本当にすごかった。ここで亡くなった人たち、それだけではなくて、この土地から出ざるを得なかった人たちの魂が揺らめいているように見えたんです。これは感動的です。

クリスチャン・ボルタンスキーさんは、2003 年にまたやるぞと言って、廃校になって５年ぐらいたった学校に明かりを入れました。僕は行っていないんですが、本当に速いスピードで「学校に明かりが入ったぞ」といろいろな人たちが言い出したそうです。口コミがどんどん広がった。

人が減って廃校になるのはしょうがないです。でも学校も家と同じようにその地域の明かりですね。本当にいい形で残ったらうれしいことです。学校が無くなると、もう自分の分身が無くなっちゃうような気持になる人たちもいます。学校を何らかの形で残したい、と思う人は多いわけです。それで、クリスチャン・ボルタンスキーは、子どもが入ってくる玄関箱にスリッパを飾りました。左側は廊下になっています。廊下に窓があって、窓から奥をのぞくと、廊下の奥に体育館があって、裸電球の下に古い学校に置かれてあったピアノがおかれている。かすかに子どもの唱歌「シャボン玉飛んだ」が聞こえてくる。グッとくるわけですね。２階に上がります。教室に子どもたちの衣服、そして、理科室です。３階に上がって音楽室。もしかすると雪のイメージが下に拡がっているのかもしれない。夕方、校庭に出ますと、雪囲いの板を使ったベンチがあって、ぴらぴらの金色や銀色が揺れている。その奥に、誰もいない舞台が裸電球に照らされているんです。人が居なくなっていく‥、ほんとにこれはさみしいことです。何とかできないものでしょうか

クリスチャン・ボルタムンキーは、2006 年に全く様子を変え、ピアノがあった体育館の方から入るようにしました。ここで使われているものを説明します。見ての通り、下がわらです。その上に雪囲いの板を使ったベンチ、その上に古いタイプの首振り扇風機、扇風機の送る風に揺れる裸電球。映像で白い雪のようなイメージが回り、時々、ストップモーションで止まります。先ほどの子どもの部屋も変わりました。これは、雪の中で休んでいるというか、もしかすると亡くなっていく人のイメージかもしれません。そういう中でも学校ということにこだわりました。

これは、2005 年 3 月に廃校になった、全員が尾身さんという名字の集落にあった学校です。廃校になって、3 人の小学生が隣の吉田小学校に行かざるをなかった所です。この学校を活かそうということで、ご存知の方もおられると思いますが、田島征三さんという絵本作家が流木と木の実でこういう 3 人の子供を主人公にした、立体絵本をつくりました。3 人の思い出です。そこにはトトラペットというお化けが居て、みなさんの記憶を飲み込んでいくというお話です。
これがきっかけで、地域の学校だけでなく、地域の人たちや集落をどういうふうにしていくかと

いう計画が始まりました。

アートを見に、たくさんの人が来られます。３０万人ぐらいの人が来られる。いろいろな人たちがリピーターになる。そういう中で少しずつ、地域に元気が出てきました。やがて、アーティスト、建築家、子蛇隊と言われるこれを手伝っている人たちが集落の人たちと一緒になって、地域の計画づくりを始めるようになってきています。

空き家は資源です。過疎の中山間地にとって最大の資源です。マイナスの資源です。ほっとけば屋根に穴があいて、ペンペン草が屋根からはえてきて、建物が壊れます。ほっとけば大変で、外から行く人にとっては、悲惨な風景です。地元の人にとっては、もっと辛いことに違いありません。ついさっきまで一緒にやっていた人の家が、あばら家になってしまう。この辺では、一軒を解体すると２５０万～３００万円かかります。そんな余裕はない。町の方にパット行かざるを得ない。そのマイナスの資産をプラスの資産に変えることができないかということをやってきたわけです。

ここも空き家です。ここも本当にぼろっちい家でした。ちょっと待ってよということで、掃除が大変でした。100 年にわたるいろいろな思い出を整理しないといけない。そのあと、これは日大芸術学部がやったことですが、梁、天井、柱、床、全部彫刻刀で削ることによって、逆に生き返らせた。これは最後の場面です。こんな感じでつくった。これも、普通だったらあばら家になるか、解体するか‥、そんな建物が今や、地元の人たちが関わるようになり、サービスを提供する場所になり、多少お金も入る。何よりもいろいろな人たちが、誰も来なかった集落に来るようになった。交流が始まったということです。

今度はこういうお祭りをやろうということまで考えて、アーティスト、日大芸術学部などのいろいろな人たちが関わりながら造りました。

市原で今後考えられること。市原はこの新潟とはかなり違います。まさに首都圏のオアシスともいうべき所で、いろいろ豊かなものがある。里山がかなり色濃く残っています。まさにその地域の残っているいろいろな密度のある生活、日本にしかない豊かな自然の関わり、里山というのは自然と折り合って生きてきた場所です。それは、首都圏の人間にとって、オアシスというかリフレッシュの場所になるだろうし、地元の人たちにとっても素晴らしい所だと思います。

今まで、大きな計画として里山を活用し、自然を残しながら、でも、現代の生活とどうやって折り合っていくかという試みはあまりされた例はございません。それが、今、市原で動こうとしているということですね。

2004 年 10 月 23 日に中越大地震がありました。震源地に最も近いところにあった６軒しかなかった家の１軒が地震でゆがみまして、この家の持ち主が都会に出ていかれました。建築の大棟梁がこられて、「これは使えるぞ」と言ってくれたので、筑波大学の民家研究の大先生に来てもらって改修の計画を立ててもらいました。ここに加わったのは、８人の焼物作家たちです。信楽焼など、まさに焼物の名作によって、この家が再生しました。

だけど、大切なのは２つ目です。集落のお母さんたち、その周りの集落のお母さんやオジサンたちが関わって、これをレストランにしました。2005 年に私たちは大地の手伝いと称して、越後妻有でいろいろな手伝いをしてきたわけです。時間を見て、この活動もしてきました。

春の山野草‥、まさに里山のいろいろなものです。秋には木の実を集めました。それで、地元のお母さんたちにこれらを使った料理をいろいろやってもらって、最終的にどういうメニューにすればよいかということで、プロにも入ってもらって、大検討をしました。ちょっとオン根の話

をしますが、50 日間で 1400 万円の売り上げがありました。地元でとれた山野草、あるいは、地元のお母さんたちの料理、それに外部の方たちのいろいろな関わりがあって、これだけのことができました。

こういったことを都会のオアシスの市原でやることができたら‥、本当にそういうことができるかもしれません。

冗談みたいな話ですがこれは名画です。名画に今度は地元の人たち主人公になった。最近、100 億円で売れたという絵です。これでも最後は大変で、自薦、他薦で収拾がつかなくなった。

これは地元のお母さんたちが、毎朝出てきて、まち針 30 万本でつくった作品です。

これは、90 代、80 代、70 代、60 代が、たまたまきちっと並んだ写真です。こういうようなことが起きてくるのです。

これはオーストラリアの集落から贈られてきたウールに、地元の人たちが刺繍をしたものです。ここにいるおばあちゃんたちは地元のおばあちゃんたちです。若い女性、そしておじいちゃんの写真です。みんなで楽しみながら、自分たちの里山で暮らした、長い、そういった中でできてきたいろいろな生活、そう言ったものをもう 1 度確認し、それを見たみんなで何か大切なものを残しながら、それを私たちがいろいろな人たちに伝えていく。地球環境が厳しい中ですごく重要なことです。

戦後 10 年間ぐらいは、東京でさえあるいは野菜や炭を大八車で運んでいました。日本に生きているほとんどの人たちは、どんな都市の人でも里山とつながった生活をしていました。たった 50 年ほど前のことです。今はまだ私たちはそういう部分を持っている。これでそれぞれの場所で、いろいろなことをやっていくことが、もしかしたら相当厳しくなった地球環境、あるいは世界全体に対して何かやっていくことができるかもしれません。

いろいろな課題を抱えながら、越後妻有の集落が元気になりました。特におじいちゃん、おばあちゃんたちが、自分の先祖代々やってきたことについて、誇りを持ちだしました。多くの外国の人、多くの都会の人たちがお手伝いに来ます。そういう里山を含めた私たちの遺伝子の元みたいなものにもう一度関わりたい、第二の故郷、自分が手伝える場所を探したいと思っているからです。

今回、市原でやろうとしていることは、世界全体からやがて来る人たちと地元の人たちが里山をベースに交わろうとするものです。市原には地の利がある。いろいろな人たち、よそからの人たちが関わりながら、新潟ではもう無くなったはずの祭りまでが復活してきました。放置してある田んぼでも、持ち主が分かると、オーナー制度でいろいろなことをやるようになりました。はとバスも来るようになった。地元のお母さんたちの料理をベースにした食堂が大人気です。家にある料理を持ち寄って検討してきたものです。

食がものすごく重要な働きをすると思います。特にこの市原とか、南房総は、食が非常に魅力的な場所です。何とか、こっちに来て食べてもらう。というふうなことにしたいと思います。今、代官山でやっている朝市に市原が出てくる。というふうなことを考えているわけです。

いろいろなことを越後妻有葉やってきました。今は、林間学校で、福島、あるいは東北の人たちの気が晴れるようなことを、都市の人たちと一緒になってやっている。いろいろな人たちが手伝いに来てくれるようなことをやっています。その中で一番喜ぶのは、草刈り体験です。大地の芸術祭を今年もやります。ぜひ、みなさん、一度見に来てください。

（文責:栗原）

「里山の輝き」

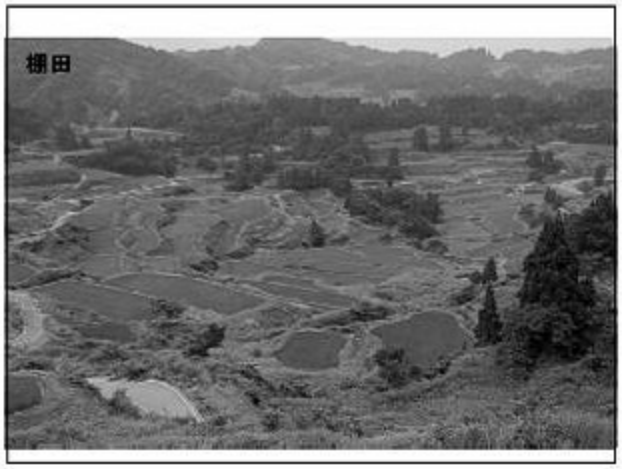
～里山の持つ魅力を再認識し、新たな可能性を探る～

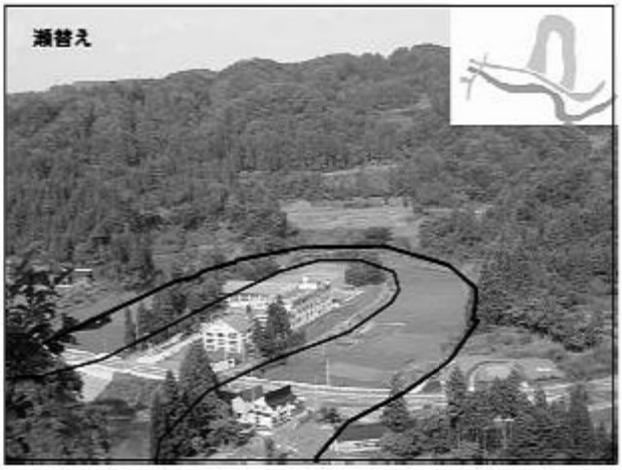
北川　フラム

ECHIGO-
TSUMARI
ART FIELD

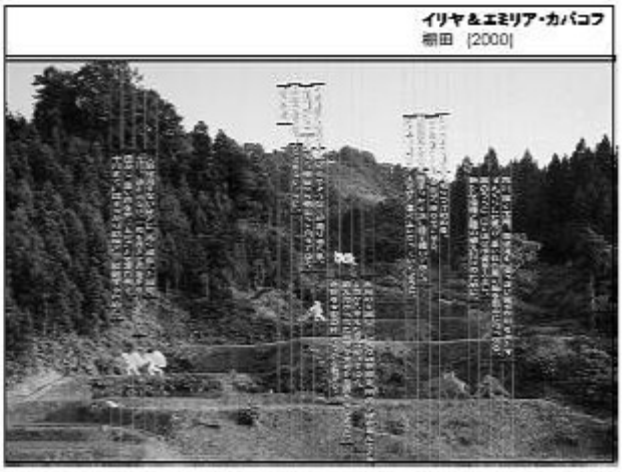
基本コンセプト　人間は自然に内包される

縄文土器


棚田


瀬替え

越後妻有のアート
田中 信太郎
○△□の塔と赤とんぼ (2000)


イリヤ＆エミリア・カバコフ
棚田 (2000)

磯辺 行久
川はどこにいった(2000)

横田 行久
信濃川はかつて現在より25メートル高い位置を流れていた(2003)

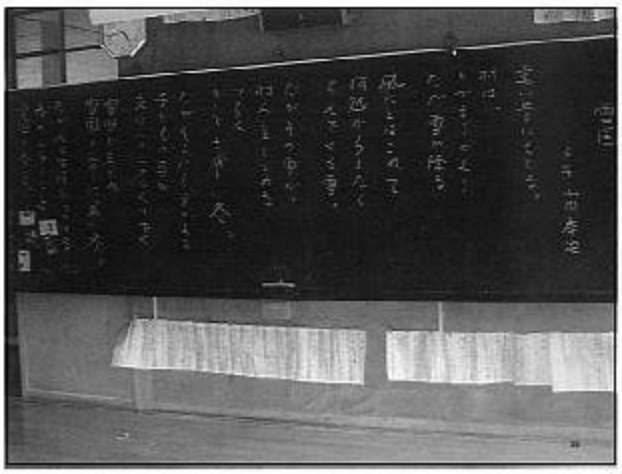
横田 行久
古信濃川の自然堤防跡はここにあった(2009)

大岩オスカール
かかしプロジェクト (2000)

ジョン・クルメリング(テキストデザイン浅葉克己)
ステップ イン プラン(2003)

時間の形象化

北山善夫
死者へ、生者へ(2000)



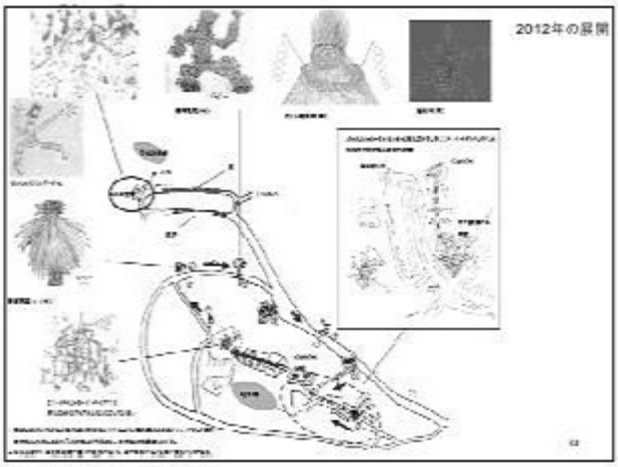
クリスチャン・ボルタンスキー
リネン (2000)

廃校プロジェクト

クリスチャン・ボルタンスキー +ジャン・カルマン
夏の旅 (2003)

クリスチャン・ボルタンスキー +ジャン・カルマン
最後の教室(2006/2009)

田島 征三
鉢＆田島征三・絵本と木の実の美術館 (2009)



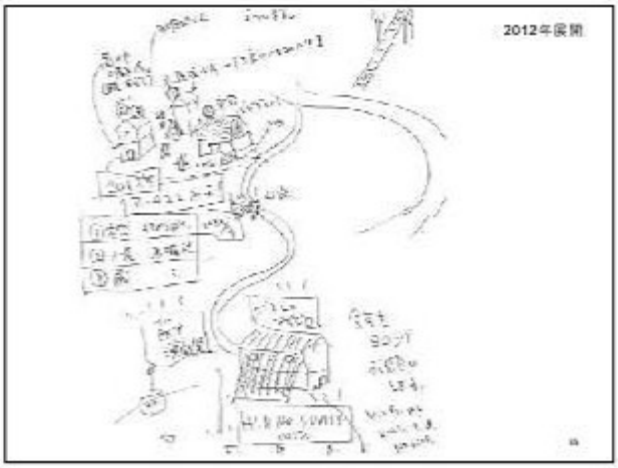
コミュニティー・デザイン・プロジェクト

過去4回の芸術祭・関連催事に関わった作家：合計約800組

集落の祭りなど継続的に訪れ、親交を深めている作家：50組以上

継続によって培われてきた人と人のネットワークを地域に有効に活かす

日比野克彦
明後日新聞社（2003－）



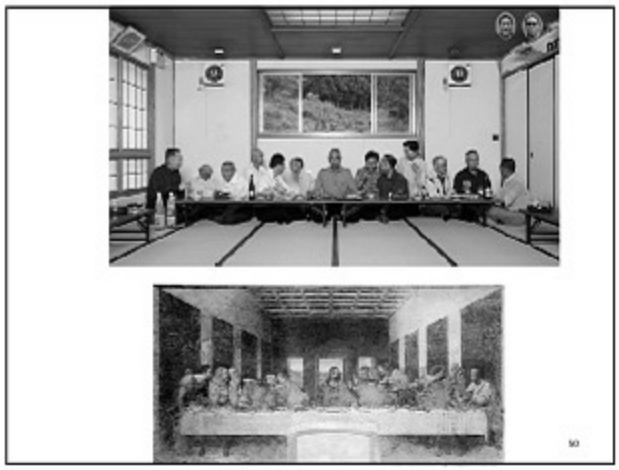
空家プロジェクト

鞍掛純一＋日本大学芸術学部彫刻コース有志
脱皮する家（2006）

2012年頃開

あるものを活かし価値をつくる
安藤邦廣,入澤美時,阿木香
うぶすなの家(2006)

大成哲雄/竹内美紀子
上蛭池名画館(2009)

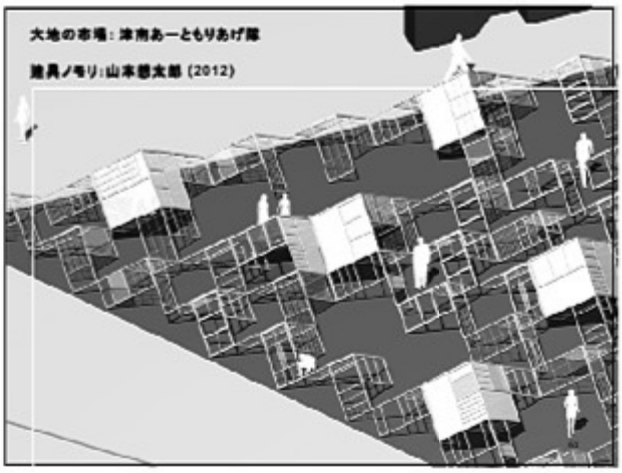


地域・世代・ジャンルを超えた協働
松澤 有子
Enishi(2009)

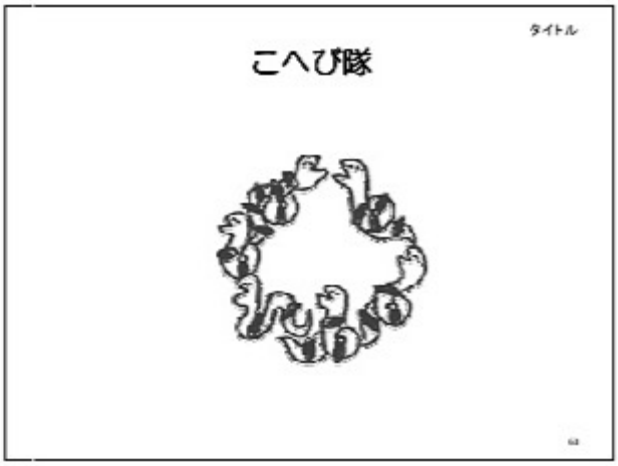
ス・ベドレー
はぜ(2006)

キングスレー・ング
風鈴(2009)

吉郷　弘
故景-II (2003)


大地の市場：津南あーともりあげ隊
建具ノモリ：山本慈太郎 (2012)

香港からのサポーター


タイトル
こへび隊

こへび隊の活動
雪掘り

こへび隊の活動
空家清掃

こへび隊の活動
イベント運営・作品制作のお手伝い

こへび隊の活動
ガイド（作品説明）・作品管理

こへび隊の活動
地域のお祭への参加

様々な活動の展開
野の師父

棚田オーナー制度

食の展開

うぶすなの家

植木と木の実の美術館

DAIKANYAMA T-SITE

すがすがしい朝が来た、おはよう代官山

代官山朝市
4月22日、スタート。

産直

グッズ開発

『Roots 越後妻有の名産品リデザインプロジェクト』

▼地域特産品の開発

■リデザインプロジェクトの全国展開

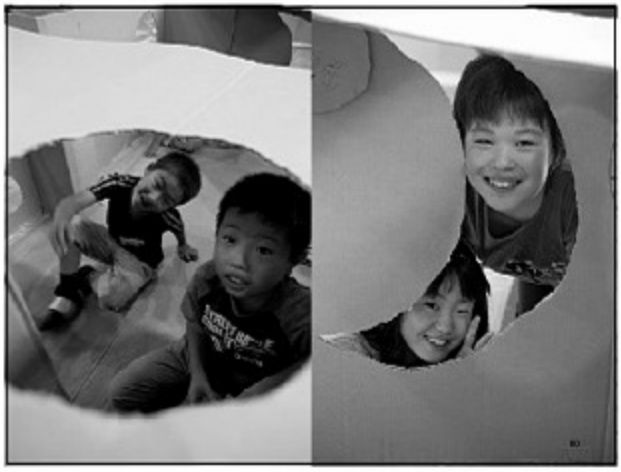
・佐藤卓クリエイティブディレクター監修による新たな商品開発
・新たなECサイトの構築→全国販売
（リデザイン酒瓶、お米、農産物(工芸、米粉 など)
・地域の産品である農産物や米粉を使った新商品開発の開発→デザイン・マーケティング

■2009年のリデザインプロジェクト

越後妻有の林間学校

ECHIGO-TSUMARI ART FIELD

林間学校ワークショップ風景
ダンボールで茶室をつくろう" みかん組



宮本亜門「違うからおもしろい、違わないから素晴らしい」

日比野克彦
「明後日朝顔種提灯つくりワークショップ」

鬼太鼓座　ワークショップ

池内プ　レクチャー「科学って何？」

加藤貴洋　“宮沢賢治『やまなし』の朗読ワークショップ”

森　賢紘
村の田植え作業「結」を皆で体験する授業

アトリエ・ワン

越後妻有の林間学校　　朝のラジオ体操

越後妻有の林間学校　　草刈り体験

里山の魅力を支える底力

～～パネルディスカッション～～

＜パネリスト＞

遠山あき（とおやまあき）

1917 年（大正　6）夷隅郡大多喜町に生まれる。

1936 年（昭和 11）千葉県立女子師範学校卒。教員となる。

1939 年（昭和 14）結婚、千葉市に住む。

1944 年（昭和 19）戦災のため夫の郷里千葉県市原郡里見村に帰る。

1947 年（昭和 22）教員を退職し、農業に従事。

1967 年（昭和 42）農民文学会に入会

1976 年（昭和 51）小説「旅立ちの朝」千葉文学賞佳作。

1978 年（昭和 53）小説「雪あかり」千葉文学賞。

1980 年（昭和 55）小説「鶯谷」農民文学賞。小説「絆」千葉文学賞佳作。ほか著書、受賞多数。

1994 年（平成　6）藍綬褒章を受ける。

2008 年（平成 20）千葉文学功労賞（千葉日報）

林　秀一（はやししゅういち）

1938 年（昭和 13）市原市生まれ。

1963 年（昭和 38）千葉大学卒業。市原市内の中学校の数学教師として 38 年間勤める。

1999 年（平成 11）定年により退職。

2000 年（平成 12）１月から、古敷谷地区の林道の奥の里山に大型ダンプによる産廃の不法投棄が始まり、地域の人々とともに産廃不法投棄の阻止に立ち上がる。里山をゴミ捨て場にさせないために里山作りを始め、現在、上小敷谷里山の会事務局長。

佐久間 隆義（さくま たかよし）

1946 年（昭和 21）　市原市に生まれる。

1965 年（昭和 40）　千葉県立市原高校卒業

1969 年（昭和 44）　日本大学経済学部卒業

1975 年（昭和 50）　市原市議会議員初当選（以来連続 3 期）

（市議会副議長、経済環境常任委員長、教育民生常任委員長 、決算審査特別委員長等歴任）

1987 年（昭和 62）　千葉県議会議員初当選（以来連続 3 期）

（県監査委員、県議会警察企業常任委員長等歴任）

1993 年（平成 15）　市原市長就任

（市原市皆吉在住）

＜コーデイネーター＞

高橋和靖（たかはしかずやす）

1941 年（昭和 16）山形県村山市生まれ。

1964 年（昭和 39）千葉大学工学部卒業、信越化学入社。

2006 年（平成 18）定年により退職。（信越ポリマー株式会社）

木更津市真里谷音信山（おとずれやま）および市原市天羽田（あもうだ）で里山活動、現在に至る。

おとずれ山の会・監事

2011 年（平成 23）NPO 法人ちば里山センター副理事長。

千葉県災害対策コーディネーター連絡会副会長。

高橋　それでは本日のパネルデイスカッションを始めさせていただきます。
会場の皆様におかれましてはお疲れのところと存じますが、いま少しお付き合いください。
パネリストのみなさんを改めてご紹介させていただきます。

遠山あきさんは市原・田渕に生活を営んでおられ、「農民文学者」として広くご活躍です。

林秀一さんは市原・上古敷谷で、里山活動団体を主宰し活動しておられます。数学のおっかない先生だったと伺っています。

佐久間隆義市原市長はもうおなじみですが、市原行政の長としてエネルギッシュな働きをしておられます。

私は、本日進行役を仰せつかりました高橋和靖です。不慣れで何かと行き届きませんがよろしくお願い申し上げます。じつは市原には”よそもの”です。それでも 30 数年を経てかなり市原色に染まってきたというところでありますが、市原をこよなく愛する里山おじさんの一人として参加をさせていただければと思っております。

今回、この第９回里山シンポジウムでもさまざまな角度から里山が論じられました。
多くの新しい発見もありましたし、いろいろな問題・課題も浮かび上がったのだと思います。

本日のパネルデイスカッションでは、これら発見や課題を踏まえ、市原を中心とした中房総の魅力とそれを支える底ヂカラについて話し合い、私たちの活動や努力の方向を見い出してゆくことにつながればと考えるところです。

ちなみに「里山」を広辞苑でみると、「人里近くにあって人々の生活と結びついた山・森」とあります。人々の生活と結びついた自然環境ということですが、こうした共通認識を踏まえて進めてまいりたいと存じます。

いまに生きている里山原体験

高橋　最初に、パネリストの皆さんが感じておられる「中房総とりわけ市原の里山の魅力とはどんなも

のであるか、子供の頃の経験や今につながる原体験」といったことについて、出来るだけ個人的な体験や感想をお話いただきたいと思います。遠山さん、お願いします。

遠山　私がここに代表として座っているのは年寄で、昔のことを知っているからだと思います。

私は　1917 年生まれですから　95 歳になります。

私が幼少のころは、今からするととても原始的な生活でした。まさに、毎日の生活そのものが里山の中で営まれていたことになります。

―― 毎日　井戸から水を汲み、山から集めてきた薪でかまどで火を起こし炊事をする。電気のないランプの生活。下刈りなどで、秋には一冬中の燃料を蓄える。小湊鉄道が誕生したのは大正 14 年（1925）ですが　それまでは「ピーポー馬車」が移動手段のほとんどでした。娯楽といえば、旅回り一座の劇を見ることくらい・・・

―― では現在はというと、田渕に住んでいる私は朝起きて戸を開ける　一晩休んでいた空気が流れ込んで来る。若い人は朝起きて慌ただしく水道で水をジャーと出し、トースターでパッとパンを焼いて朝食、車でさっと出かける――。　大地や水、空気の恵みというものを忘れてしまっていると思います。昔をただ忘れてはいけないというわけではありません。現在は過去の上にあることを忘れてはならないということだと思います。

高橋　遠山さんは、その著書の中で、「里山」は「生活そのもの」であった。まさに、“おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に”の世界があった――　と書いておられます。まさにそういうお話をいただきました。

佐久間市長はずっと「牛久・皆吉」に住んでおられると伺っております。お小さいころの思い出等も含めて、時代の変化と里山の現状、などについて、感想なども含めてコメントいただきたいと存じます。

佐久間　私は牛久に生まれ育ちました。父親は大工をしておりましたが、家は貧しく，チャッケイ（小さい）ころは「悪ガキ」でした。年上の仲間に誘われて，竹を切って売ったり・・・。分け前はアンパン 1 個。また、ヤマイモ掘りをしたり，近くの養老川で流しバリで釣りをしたりしていました。夕方に川の中に仕掛け，次の日の朝に引き上げるんです。いろいろ危ない経験もしましたが，そういう子供時代の里山原体験はいまに通じますし、日本人が世界を相手に活躍してゆくためにはとても必要なことだと思っております。

産廃不法投棄阻止をきっかけに

高橋　佐久間市長の元気の源が里山にあると分かったように思います。

林さんが里山活動を始められたきっかけについてお話いただけますか。

林　古敷谷の林道奥の谷津田への不法投棄が始まったのは、平成 12 年 1 月 6 日のことでした。わたしは子どものころから古敷谷の山や川に育てられたのですが、その古敷谷がゴミ捨て場にされていることは

許せることではありません。同じ思いの人が非常に多く、町会で思いを訴えると町会挙げての反対運動が始まりました。

6月30日に業者が逮捕されましたが、不法投棄を止めるのに6か月かかったことになります。その6か月間でダンプ3000台分の産業廃棄物が投棄されてしまいました。町会の総括会で反省点が話し合われたのですが、その中で次のよう結論に至りました。

「谷津田が荒れ放題になっていることが原因である。谷津田をゴミ捨て場にしないためには、里山づくりが必要である」さらに「蛍が飛び交うような里山の景色を取り戻し、子ども達に伝え残して行こう」――と。これこそが、谷津田をゴミ捨て場にさせないために有効な対策であると町内会で訴えました。

そうすると、30人ほどのメンバーがスコップやクワを持って里山に集まってくれたのです。平成13年2月11日のことでした。古敷谷の里山活動の始まりです。

古道復活、ホタル飛ぶ里山づくり

高橋　こうした里山の魅力は、草花や生物はもとより、地形や景観、風習や人情等、多岐にわたるわけでありますが、時代が移り、社会構造の変化や生活様式の変化等によって変化したり失われてしまうものもあることも事実であろうと思います。時代の変化に応じた新たな魅力を構築してゆかなければならないのではないかという思いを強くするところです。

そんな意味で、パネリストの皆さんが、現在、力を入れて取り組んでおられることをお話いただきたいと思います。

遠山さんは里山生活に根ざした多くのご著書を著しておられます。市原・中房総を貫く養老川と小湊鉄道への想いなども併せて、いまどんな活動をされているかをお話いただけますか。

遠山　今は過去の積み重ねだということをつくづく感じています。つまり、未来は現在をどう生きるか、階段を上るように現在を積み重ねていくのだと思います。

私の住む田渕という地域は山村ですが、その周辺を軸にどういう文化・生活形態があったのかを確認したいと思っています

市原市の背骨に見えるのが養老川です。その養老川の歴史を調べました。またその川に寄り添うように走る小湊鉄道の歴史についても調べました。そして、それらを纏めました。

いま調べているのは、その昔人が歩いていた道です。消えている道もありますが、獣道の跡が残っていたりします。昔の人がどんなことを思って歩いていたのを想像します。古道というものですね。

「めだか塾」と交流を持っています。「めだかの学校」という歌がありますね。「めだかの学校は川の中誰が生徒か先生か・・・」という歌詞のようにみんな先生であり生徒だと思っています。だからみんなから教えてもらっています。

現在は車や電車で行くけれど昔は歩くだけ。その道の道しるべを発見しました。「江戸道」と言われるものです。磯ヶ谷から新堀あたりまで見つけました。八幡や五井あたりまで行くのは、養老川を船で一気に進んだようです。その後江戸へ行くには海を渡ったと思います。「船橋道」「蘇我道」と呼ばれるものもあります。

「江戸道」には山の背を行く道もあります。万田野から牛久、大多喜から古敷谷、高滝という道もあります。音信山には　千葉県一の「道標べ」がありますね。

今を思うと、ぜいたくに生きすぎている気がします。それで、多くの問題が起きるんです。原子力の問題などを見ても「文化の便利の裏返しは危険」だと思います。

私たちは未来の子供たちの生活を培っていかなければならないと思います

高橋　遠山さんから、地域周辺の先人の歩いた足跡をたどりながら、今の私たちの暮らしや心のありようにつなげようというお話をいただきました。

林さんが取り組んでこられたことも、“地域の人びとによる地域づくり”であり、それが里山を支える“底ヂカラ”になっていると思います。とりわけ力をいれておられるのはどんなことですか。

林　「蛍が飛び交うような里山の景色を取り戻し、子ども達に伝え残して行こう」というスローガンで活動をしています。里山活動に地域の子ども達を参加させたいと考えました。そこで、地元の富山小学校、全校 30 名程度の小さな小学校、の校長先生に協力依頼をしたところ、快く承諾してくれました。当時の学校には総合学習の時間がありましたが、「総合学習の時間を使って、春、夏、秋と年 3 回、全校児童で里山に行きましょう」と約束してくれました。カブト虫牧場や、カワニナを増やすためにクレソンやセリを増やす活動、花を植える活動などを全校児童と行いました。里山に行くと、子ども達はドジョウやザリガニを捕まえたり、野鳥を観察したり、花を摘んだりと非常に活き活きと活動する。

また一方で、そば打ちや餅つき、おにぎりを握るなどして、里山の会員が子ども達をもてなすようになりました。子ども達と里山会員との間の交流が活発に行われるようになり、平成 19 年にはグッチ雄三さんが訪れ、沢歩きやそば打ちなどを子ども達とともに体験し、その様子が 4 チャンネルで全国放送されたこともありました。

ある年の 4 月 11 日に新入生を招いての里山歩きが催されましたが、あとで新入生の母親から喜びの電話がありました。「里山から帰った子どもが、非常に興奮してまして、里山であったことを夢中で話してくれました。お風呂にまで一緒に入って里山の話をしてくれました。里山ってすごいですね！」

子どもにとって里山は、新しい体験の場であり、発見の場であり、学習の場です。私たちが思っている以上に、子ども達にとって大きな教育力を発揮します。小学生は 6 年間、里山に来続けます。すると、里山が自分の庭のようになってきます。私たちは、子ども達を里山活動に参加させることを追求してきました。それが非常に良かったと思っています。

里山の会員は年寄りが多いんです。会員と子ども達が一緒になって何かをするということは凄いことだと思います。里山活動を続けるうちに、地域のおじいさん、おばあさんが富山小学校の行事に積極的に協力するようになりました。里山活動を続けてきて、非常に良かったと思っています。

里山交流会や活動支援補助金

高橋　子供たちを組み込んだ活動により、その子供たちがまた里山の守り人としての「底力」を発揮してゆく――未来への希望につながるお話をいただきました。

さて、里山は生活の場であり、農林水産、観光、教育や福祉、防災といった様々な分野に広くかかわり合いをもっていて、まさにまちづくりの中に位置づけられます。里山の多面的機能に着目し、それを活かしてどう取組んで行くのか、市原市が進めている森林・里山行政について、特に最近の力点を置く

施策の現状についてお話ください。

佐久間　里山を守ることは先人の文化を守ることであり、非常に大切なことでありまたすばらしいことだと思います。遠山先生が言われたように「現在は過去の積み重ね」であり、また「現在の積み重ねが将来」です。「今」がより良くなければ「将来」はよくならないということです。「おたがいさま」の気持ちを持って，みんなで分かち合って助け合う必要を痛感しています。

近年地球温暖化などの問題が生じる中で、里山を含めた緑の保全や創出、また適切な管理を行うことは市民の皆様が安心して健康に暮らしていくうえで欠かすことのできないものです。

そしてまた、私は里山には、大きな魅力や可能性を感じています。里山は、多くの動植物が生息する生物多様性の豊かな場所であるとともに、その美しい景観に人は魅せられます。

本市にも養老渓谷などの緑豊かなふるさとの原風景が残されており、特に晩秋には、里山の美しい紅葉を見るために数多くの方が、本市南部地域を訪れています。

しかしながら残念なことにその一方で里山の原風景が多く残る本市の南いちはら地域などでは、高齢化とともに人口が減少し、里山から人の手が離れ、徐々に里山が荒れ始めてしまっています。荒廃した里山は、イノシシなどの有害獣の温床となり、周辺農地の農作物被害が拡大し、生産者の方の中には、耕作意欲を失い耕作を断念する方もおり、新たな耕作放棄地の発生につながるなどの深刻な問題も引き起こしています。

そのような中でも、本市には、この会場にいらしている方々のように里山の保全や整備、再生のため熱心に取り組まれている団体が数多くおられ、私はとても頼もしく感じています。

私ども市原市としましても、その方々の活動の少しでもお役に立てるようにと、里山活動団体間の更なる連携を図るため、「いちはらの里山を守る交流会」を設置して皆様の情報交換のきっかけづくりに努めているところです。

また、里山活動団体の方々の活動に必要な機械や道具の購入についてお役に立てばとの考えから、昨年度に里山活動団体の支援策として「里山活動推進事業補助金」制度を立ち上げましたが、昨年度は、２団体、本年度は今現在４団体の里山活動団体の方々からご応募いただいたところです。今後より多くの団体の皆様にご活用いただき、本市の里山活動の活性化の一助になればと考えております。

市制 50 年にアートフェスティバル

佐久間　私は、里山の保全は観光振興とも密接な関係にあるものと私は考えます。

人口減少時代を迎えたいま、これからの自治体はいかに外部から多くの人を呼び込むか、つまり交流人口を増やすのかが大きな課題の一つであり、多くの方が訪れていただくことで地域が活性化するものと考えていますが、里山は先ほどお話をさせていただいたように、さまざまな魅力がありますので大きな集客の役割も果たしてくれるものと考えています。

私ども市原市は、平成 25 年度に市制施行 50 周年を向かえることから、その記念事業として、南いちはらを舞台としたアートフェスティバルの実施を計画しています。林さんのホタルの里づくりはアートでもあると思いますが、アートフェスティバルは、本シンポジウムで基調講演をなされた北川フラムさんに総合ディレクターをお願いすることになっています。

北川フラムさんは、本市の他にも新潟県十日町市などで 2000 年から開催されている「大地の芸術祭・

越後妻有アートトリエンナーレ」というイベントにもディレクターとしてご活躍されています。北川さんの今日のお話の中にもたくさんのヒントがありました。新潟県十日町市は、本市の南部地域同様に人口減少という問題を抱え、立地条件もアートイベントを開催するには必ずしも良い場所ではないように伺っております。しかしながら、第4回が開催された 2009 年には 30 万人もの方が十日町市などを訪れて、地域の活力の源となるイベントになっているそうです。これも十日町市などの里山の自然を北川フラムさんがアートとミックスさせた成果であると考えるところです。

本市では、間もなく圏央道の開通もありますので、このアートイベントやそれ以外にも数多くある観光資源をご覧になりに、全国から多くの方にお出でいただけるものと期待していているところです。

なお、本市観光にあっては、「誇りと愛着のもてる地域が潤う観光まちづくり」を基本理念に掲げておりますが、本市のアートイベントについて、北川フラムさんはじめ地域の方々や行政や作品を制作させるアーティストなど携わる方々すべてが一体となって準備を進め、おもてなしの心をもって来訪者の方をお迎えする中で、多くの「きずな」が生まれるとともに、ふるさと市原への誇りと愛着にも繋がり、まちづくりにもかならず活かされるものと確信しております。

また、南いちはらにおけるアートフェスティバルの開催は、里山への関心も深め、里山の大切さに気づかれた方々の中から多くの皆様と志を同じくする里山保全活動への参加者が増えることも期待するものです。そのさきがけとして「世界一広いトイレ」を作りました。これについてはいろいろな意見もありますが，ウォールストリート・ジャーナルや Japan Times でも取り上げられ注目されています。

高橋　市原市の里山行政に対する心強いお話をいただきました。今日お集まりの「底力」をさらに強くしてゆく「底力」なのではないかと思います。また、話題の飯給のトイレは今回の「小さな旅」で見たわけですが、大いにびっくりしました。驚いた半面、南市原の活性化を目指す市原市の並々ならぬ決意のほど―ここまでやるかというか、こうまでしなくてはならないのか――といった現状への危機意識と市原市の取り組みへの覚悟を見る思いがしました。

さまざまな困難・ご苦労がおありでしょうが、長期視点で進めてゆく課題であると考えますので、地域との連携の中で、市長はじめ行政の関係の皆様の粘り強いリーダーシップの発揮に期待する次第です。

里山づくりで強まる地域連携

高橋　林さんがやってこられた活動は、地域の暮らしにどのような変化をもたらしたでしょうか。そしてこれからどのように進めてゆかれるのでしょうか。

林　里山づくりは毎月第一土曜日を活動日とし、草刈りや水路の整備などを進めてきました。

午前前 8 時から 11 時半までが作業時間ですが、みんな時間が過ぎても、話に花が咲いて一向に帰ろうとしないんです。その様子を見て、お茶を飲んでゆっくり話ができるように 30 畳の小屋を作りました。真ん中には大きな囲炉裏を設えました。古敷谷周辺には 6 本の上総掘りがあり、その中の 1 本を里山に引いきました。そしてそばやうどんをつくってたべてから帰るということを繰り返すようになりました。

すると、地域の老人たちのコニュにケーション作りの場となり、みんな、それを楽しみに里山にやってくるようになりました。活動を初めて 12 年間、一度も休むことなく続けることができました。

私のところに来る、富山の薬屋さんや農協の集金の人、郵便配達の人たちが、口を揃えて「この地域はよそと違う。とても雰囲気が良い」と言ってくれます。里山が、老人のコミュケーション作り、地域

作りに役立っているのを感じるところです。

周辺を整備しきれいに保つことによって、結果的に不法投棄をやめさせることができました。そうした成功体験の共有が“たからもの”となり、地域の連携が強まりました。これからも里山作業を進めることによって“人間関係の希薄化”に歯止めをかけてゆければと考えています。また、里山づくりを始めたころは、ホタルが５～６匹程しか飛んでおらず、それも古敷谷川の小さな支流でしか見られませんでした。ところが３年前に異変が起きました。突如、古敷谷全体にゲンジボタルが乱舞するようになったんです。自然は、我々が少し手を加えれば回復できる力を持っていること、それには 10 年くらいの年月が必要であることを感じました。皆さんも、１年や２年ではなく 10 年単位で頑張ってほしいと思います。

高橋　自然は、粘り強く継続的に活動してゆけば必ず報いてくれること、また、里山づくりは、そこに住んでおられる方々の力を結集した地域づくり・町づくりにつながるものであることをお話しいただいたと思います。遠山さんの作品には、その土地の自然とともに生きる喜びが輝いています。「経済的に豊かになることと、人間そのものが豊かになるということは、似ているけれども根本的に少し違うように思えます。」とも著書の中で言っておられます。これからの生活への姿勢はどうあるべきでしょうか。

遠山　私は、科学文明の発達で人間は無器用になったと思います。パソコンを使えばひとつずつ文字を考えながら書かなくても機械がやってくれます。湯を沸かすのも、ボタンひとつで済むようになっていて、人間の基本的な知恵がどんどんマイナスになっていく――。

いま電気がなくなったら生活ができなくなります。ところが昔の人は稲を育てると藁が出来る。できた藁で屋根の下地をつくる。縄にする。むしろを作る。ぞうりを編む。かましきにする。ほうきを作る。たわしを作る――。あるものをいかに利用するか。昔は大いに頭と指先を使っていたんです。ないものをどうするかを考えるから知恵を使うんです。いまその頭とゆびさきの器用さがなくなっていっています。日本は文明が一流だったのに、いまではいくつかの国に抜かれてしまいました。反省と工夫が（ないものをどう活用する）大切だと思います。

現在、世界中でエネルギーで困っています。原子力で伸びてきたけれども、永久に伸びるはずがないですよね。だから 21 世紀中に水飢饉が必ず来る、何よりも大切な水不足が来ると思います。なぜなら森が荒れる、　ゴルフ場・田んぼがなくなる、必ず水戦争があるでしょう。

水を枯らさないために里山を守らなければならないと思っています。

ブータンに学ぶ“しあわせの意味”

高橋　持続可能な循環社会という意味で、教育に自然環境保全の視点を取り入れるのは、活動を将来につないでゆく上で極めて重要だと思います。

時間が残り少なになってしまい恐縮ですが、人類の将来に向けて、子供たちに何をどのように伝えて行ったらよいでしょうか。

遠山さんからも暮らし方を見直す必要があるとの指摘がありましたが、佐久間市長がよく引用される“ブータン国幸福論”に学ぶことなども含めて、ひとことお願いします。

佐久間　現在,「市民環境大学いちはら」を開講しています。市民のみんなに講師になってもらい，環境問題の大切さをご承知いただくためにやっています。地球上の水が足りなくなる，温暖化，南極や北極

の氷がとけるなど，いろいろ起こっていますが、遠山さんのご指摘の通りだと思います。

先日ブータン国王ご夫妻が来日されました。温かい震災お見舞いをくださいました。台湾からは，震災後一番高額の義捐金が送られてきました。東大名誉教授の月尾嘉男先生が 2011 年 11 月にブータンを訪れ，その様子が TV でも放映されていました。GNH（国民総幸福量）という言葉があります。ブータンでは 3 代前の国王から GNH を高める政策を行っており，実際，国民の 98%がしあわせと感じているそうです。

幸福感を共有できる国家（社会）であること，GNH を高めることが必要だと思っています。これから市原では，観光，農業も組み込んで，市の振興・活性化を行いたいと考えています。

林　日本野鳥の会会長の柳生博さんは、「日本の里山の原風景を知っているのは 70 歳以上の人たちだ」と言っています。つまり、田んぼを牛や馬で耕し、カマで草を刈った、あの時代の日本の風景が里山の原風景なんです。里山作り、里山作りというけれども、日本の原風景を知らない人は、里山作りのイメージが湧かないんです。だから、70 歳以上の人は里山作りを頑張れ！里山作りの見本を示せ！と。

柳生さんは、「確かな未来は、懐かしい風景の中にある」という言葉も残しています。

地域の子供たちとの里山づくりを通じて時代をつなぐ継続的な活動にしてゆきたいと願っています。

遠山　中房総に限ったことではないし、子供に限ったことではないけれども、水は最も大切なものです。養老川沿いには、「川回し」や「サイフォン隧道」など随所に水との戦いの跡が残っていて、興味深く感動的でさえあります。地域を貫いて流れる養老川のめぐみ、水の大切さを追求し訴えてゆきたいと思っています。それと、里山には自然と共生して生きる質素で誠実な生き方がふさわしいと思います。自然に対する謙虚さ、感謝の気持ちを忘れないで暮らしてゆきたいと願っています。

高橋　佐久間市長が話をされた「市原環境大学」に、私はもう４回（４年間）受講していて非常に勉強になっています。そのなかのある講義のなかで衝撃を受けたのですが、「地球が直径１メートルのボールだったとすると、体積は 530ℓほどなわけですが、その地球のすべての水を集めても２ℓに満たない。しかも、そのうち淡水はお玉で一杯（30cc）だけ。身近の飲める水となるとスプーン一杯！でしかない・・・・地球は岩石や鉄の塊で、決して“水の天体”ではない」――と。そして「もし地球の表面がツルツルだったら、降った雨は瞬時に海に流れてみんな海水になってしまう。その水を里山がホールドし支えているのだ」と気づかされました。

社会構造や時代の変化によって、生活様式も変わってゆくのはある程度は止むを得ないものがあります。しかし、生物の生存に欠かせない「空気」や「水」に影響を及ぼすような変化には敏感でなければならないと思います。森林は空気や水に関わる生命維持装置であり、ほかにも山崩れ等の災害防止、防風、防砂、癒しなど、実に多様な機能をもつ「社会資本」です。その森を含む里山で生活する人類は、普段に適切にメンテナンスしてゆかなければならないということだと思います。

それは、まさに里山を支える底ヂカラによって可能になるものでありますし、残っている里山を大切に保全し、失われた里山で復元できるものがあれば復元し、さらに新たな魅力を発見して付け加えてゆく――そうした里山活動を通じて自然と人間との共生が改めて始まるのではないか、佐久間市長のいわれるブータン国の GNH につながるものが見えてくるのではないか―、そんな風に考えるところです。

本日のパネリストの方々はもちろんですが、今日お集まりの皆さんを含めて国民全てが里山を護る底ヂカラであり、あり続けることが必要なのだということではないでしょうか。

もう一つ心強い“底力”があります。それは、遠山さんの作品に登場する「ますばあさん」や「ハナさん」、「庄ざえもんさん」や「おミネちゃん」など里山に生活する大勢のみなさんで、この人たちは永久にこの原風景の中で生き続け、暮らしのなかでキラキラ輝き続けてゆくものと思います。

ご参加くださった皆様に心から御礼申し上げます。

パネリストの皆様には重ねて感謝を申し上げます。改めて感謝の拍手をお願いいたします。

それではお開きとさせていただきます。ありがとうございました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

――会場からの質問および意見――

◆さすが遠山先生、水問題を明確にしていただいたと思います。小敷谷の活動は、高滝ダムの上流に当たるので、いま問題になっているホルムアルデヒドのような問題が起こるところでした。

市全体としては、動植物についての環境部の報告がありましたが、後退している印象を受けました。もっと活動を強めなければならないと思います。

また、市は県に働きかけて、米沢団地（米沢の森）を「自然公園」としてもらうように提起して欲しいと思います。（市原市内在住者）

◆貴重なお話をありがとうございました。市原市は空から見るとゴルフ場がとても多く、市原の皆さんはどう考えているのだろうと思っていましたが、今日の発言にはひとこともありませんでしたね。（大網白里からの参加者）

◆亀成川を愛する会で、水源としての原っぱを里山として保全しています。里山を護ることはとても大事だというお話を聴いて大変に力づけられました。6 月 2 日に、今回のシンポジウムの分科会として「命育む印西の原っぱ」というイベントを開催しますのでご支援をお願いいたします。（印西からの参加者）

◆遠山先生、林先生のお話を興味深く伺いました。ただ、今日のシンポジウム、発言する機会があると思ってきたのですが、その形でなかったことは残念に思いました。

市原市の場合、井戸の使用が多く、地面が陥没したりしないか不安があります。また、水質にも問題があります。県も市も井戸の規制を考えるべきと思います。（市原市在住者）

＊このパネルディスカッションでは、予定の時間を大きく超過してしまったことから、参加者との意見交換に替えて、ご質問やご意見を承るだけとさせていただきました。悪しからずご了承ください。

＊この項のまとめに際しては、石崎千恵、風間俊雄、並木秀幸、杉田初代各氏のご協力をいただきました。

第９回里山シンポジウム分科会報告　　**第１分科会**

報告者　金親博榮

分科会名　　**農業分科会**
テ　ー　マ　　**北総の農林業の歴史の勉強会**
日　　時　　2012 年 2 月 25 日(土) 13：30～
会　　場　　わたしの田舎」谷当工房　千葉市若葉区谷当町
参加者数　　１７人
スタッフ　　金親博榮、池田、佐藤、久喜
趣　　旨　　谷当の耕作放棄された谷津田を、復活させ、湧き水、表流水という自然の水利で、生物多様性に富んだ米作り（冬季湛水、不耕起、無農薬、無化学肥料）を具体的に展開するに当り、その意義や　歴史を学ぶ機会とする。

講　演　①　　林紀男氏　千葉県立中央博物館　（生物多様性に関する谷当里山計画の可能性）

田んぼの小さな生き物たちは食物連鎖（捕食、被食）食物網という位置付けで、互いに不可欠な存在。冬水田んぼはミジンコ天国　ミジンコは真ん中に目が二つ、単眼と複眼を併せ持ち、」、二枚貝のような形で、その間に植物プランクトンをこしとって食べている。みどりが多いとプランクトンが多い　捕食者である魚が多いと透明になる。ミジンコの毛は 1 ミクロンのさらに細かい毛で水をこすので、水が透明になる。中干しや冬の乾燥期はカラ付きの卵を産んでやりすごし、慣行農法の田んぼと冬水の田んぼはミジンコの卵の密度が明らかに違う。ミジンコの卵は乾燥が続くと孵化率が極端に落ちてしまう。生物学的には同じミジンコも、慣行と冬水で孵化率が変わってくる。原生生物はミジンコの主食。田んぼ毎に、水を入れる時期や肥料によって、原生生物の個性が変わる。冬水では年中原生生物たちがたくさんいるが、生物が増えるといいうのは正しくない。ピーク個体数ではなく、分布の時期的な面積を比較すべき。食物連鎖ピラミッドの底辺となる生物数が多いほど、集まる生物数がふえてくる。田んぼに上がってくる魚も冬水の方を選んで登ってくる。鷺やコウノトリも冬水に集まる。総合的病害虫・雑草管理 IPM　総合的生物管理 IBM　たくさんの生物多様性が確保されることが場が安定することになり、除草剤、殺虫剤、殺菌剤等の際限ない投与による人工管理はだめ。　ただの虫も大事。収量至上主義から脱却　農薬低減、施肥適正化、種多様性、生物の現存量拡大を目指す。

講　演　②　　白井　豊氏　千葉県立中央博物館　（近世以来の北総の里山景相の変遷）

千葉市の特徴として、下総大地には新炭林としての松林が多かった。詳細は中央博物館のＨＰ参照。歴史的農業環境閲覧システムで検索すると、明治時代に作られた地図がでてくるが、その後の、農業土地利用情報の把握には、西南戦争が契機になり、土地利用の仕方を確定しておく必要があった。軍用の地図「迅速測図」を利用。現代では針葉樹林と統一されてしまう松、檜、杉などが分けて表示。検見川辺りは畑で、それ以東は松林が続き、武蔵野台地は畑と雑木林、下総台地は畑と松林松林があった。古墳のあるところに行けば良くわかるが、松は人が手を入れないとダメだから、切ったら植え替えをしないといけない。下総大地の松林は人間が頑張って維持し、伐材を切り出すための道路も整備されていた。

千葉は江戸・東京への主要供給地　　薪は常陸、下総、上総　　炭は伊豆、下総、上総。
明治当時は、千葉、茨城は東京への燃料基地であり、乱伐が心配されたが、松は栽培されていた。
1 下総では松林が非常に多く　2 薪炭林として人工的に育成され　3 江戸東京向けの燃料となっていた　　4 薪炭林の維持管理は持続可能な形で工夫されていた。松は、他にも初茸や漢方の材料茯苓が摂ることができた。照葉樹林文化、松林もあった。　鎮守の森は最近できたものである。

第９回里山シンポジウム分科会報告　　**第２分科会**

報告者　金親博榮

テ ー マ ：**「生物多様性の米作り・里山バンキング」**

日　　時 ： 2012 年 4 月 8 日（土）午前 13 時 30 分～午後 16 時 20 分　　終了後：交流会

会　　場 ： 千葉県立中央博物館・講堂

主　　催 ： NPO 法人バランス 21 谷当里山計画、里山シンポジウム分科会

参 加 者 ： 一般参加者：計８０名

スタッフ： 金親博榮、阿部順、池田宏治、佐藤聰子、田澤浩一、青柳久、堀泰洋、他会員&久喜伸晃

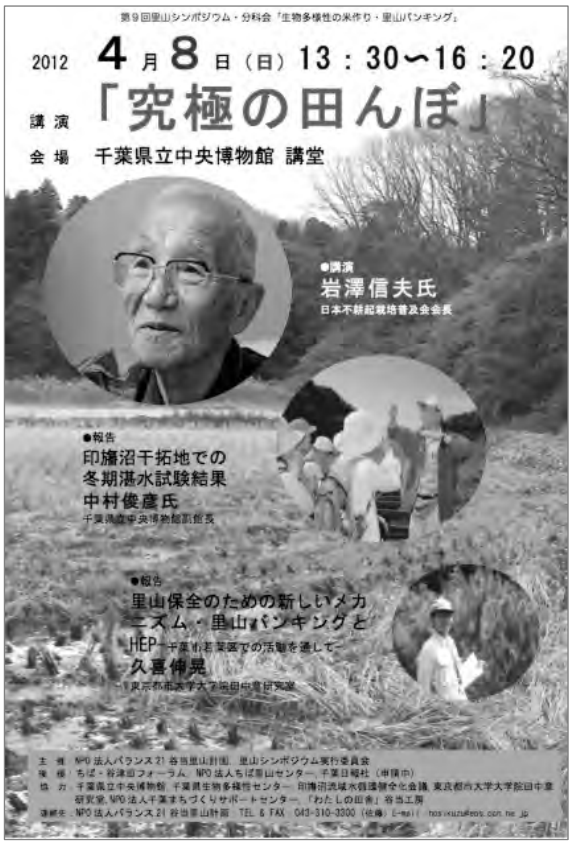
趣　　旨 ： 循環型農業による生業の再生とともに都市住民と里山をつなぐコミュニティづくりや子どもたちの自然体験、自然観察会の場京成をめざす実験場として、私たちは、印旛沼流域鹿島川の中流域に位置する千葉市若葉区谷当町の耕作放棄の谷津田、周辺山林のさまざまな再生、整備活動をスタートさせました。冬期湛水・不耕起栽培の米作りと谷津田に繋がる湧き水の池の保全、さらに生物多様性の変化を継続的調査に学び、農地・農業の多面的機能復活のキックオフにしたいと思います。

講　　演 ： **「究極の田んぼ」岩澤信夫氏**（日本不耕起栽培普及協会会長）

報　　告 ： **「印旛沼干拓地での冬期湛水試験結果」**中村俊彦氏（千葉県立中央博物館副館長）

「里山全のための新しいメカニズム、里山バンキングと HEP」

-千葉市若葉区での谷津田再生を通して-　久喜伸晃氏（東京都市大学大学院研究生）



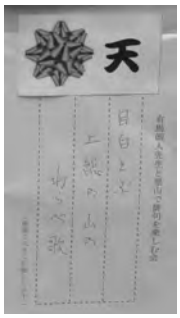
岩澤信夫氏の体調不良により鳥井報恩氏（日本不耕起栽培普及会監事・元千葉県立旭農業高校教諭）の米作りの写真展開の豊富なお話を聞いた。

それぞれの地域で無農薬農業に取り組んでおられるみなさんと熱く語る交流会となった。（中央博物館会議室にて）.

まとめ：今年、１月４日から耕作放棄地の開墾をはじめ、はびこるクズやガマの根っことの闘いをして、３月に育苗、５月、田植えに漕ぎ着けました。９月２９・３０日に稲刈りが出来ることになり、収穫祭が出来そうです。冬水田んぼに生きものが戻ってくることを願っています。

市原米沢の森を考える会代表　鶴岡清次

分科会名：有馬朗人先生と里山で俳句を楽しむ会
テ　ー　マ：森の息吹を感じながら句会を楽しむ
日　　時：平成 24 年 3 月 4 日（土）10 時～15 時
会　　場：市原市米沢の森
参加者数：60 名
スタッフ：15 名
講　　師：有馬朗人先生（天為俳句会主宰・元東京大学総長・元文部大臣）
趣　　旨：早春の自然のなかで句会を開催し文化活動のフィールドとして活用する。
内　　容：米沢の森を登り頂上のおじゅうはっちゃ地点にて投句。
ひだまり広場においてつきたての餅とスタッフ特製のとん汁で昼食会。
引き続き句会を開催。有馬先生による選句と優秀作品の表彰式を行った。



優秀句（天）「目白とぶ　上総の山の　わらべ歌」　伊賀和子氏
〃　（地）「浦島草　落人村に　集い咲く」　山田香津子氏
〃　（人）「町せまる　総の国なる　春田かな」　塩原佐和子氏
その他、「上総更級会賞」「米沢の森を考える会賞」や、追加の佳作の数々で盛りあがった。

ま　と　め：米沢の森はスタッフが整備・保全と取り組んで約 8 年、少しずつ里山として復活し、人々に愛される癒しの森になりつつある。
この森には、古墳や古道、炭焼き窯跡、草競馬広場だったといわれる場所等、歴史と文化が数多く残っている。里山として人々の生活に密着していた名残だろう。
今回、有馬先生をお迎えし大勢の皆様のご参加を得て、俳句を楽しむことができたことは、とても有意義なことだった。
昼食時には、懐かしい餅つき風景もあり、のど自慢のスタッフによるオリジナル曲「米沢の森愛唄」の披露で、手拍子もにぎやかに楽しんだ。
協賛していただいた上総更級会様・差し入れしていただいた南市原花いっぱい実行委員会の深山様・お餅つきの指導をしてくださった地元の方々、心からお礼を申しあげます。

報告者　おとずれ山の会　高橋和靖

■分科会名：里山で“暮らし”を考える

■日　　時：平成 24 年４月８日（日）

■会　　場：おとずれの森

■参 加 者：18 名

■スタッフ：おとずれ山の会員９名

■趣　　旨：

↑森の散

↑山桜の下で

↑森の散策

↑空見るベンチでひとやすみ

自然との共生を目指し　この一年、大震災がありました。洪水や山崩れも頻発しました。原発事故まで発生しました。ただでさえ、人類の誕生によって地球への負荷が増加し、自然破壊や異常気象、温暖化やエネルギー問題など、さまざまな影響が及んでいると言われている折から、こころなしか、地球の動きが激しくなってきているようにも感じられます。里山は、以前は生活の場そのものでした。自然と共生する中で癒されながら、自然からのメッセージを聞き取って、日頃の暮らしに役立てられないだろうか。里山の恵み・里山の懐かしい心のゆとりを暮らしの中に取り込むことは出来ないだろうか。よりよい生活者であるために考え行動したいと考えます。

↑段ボール簡易燻製の実

■内　　容：

●森の散策ー森人への回帰

海から出てきた生命は、森という懐に抱かれて進化・成長を続けたと推測されます。私たちが森に入るとなんとなく心がやすらぐような気がするのは、私たちの体内には“オランウータンの時代”を懐かしむ DNA が流れているからではないでしょうか。“フィトンチッド”（植物が放つ香気成分）など、森のなかにおける身体や精神に与える癒し効果も研究され実証されつつあります。

●省エネ・保存食―今回は燻製にチャレンジしました

この音信山一帯は厳しい修験の場でもあったようで、自給自足の生活があったと考えられます。先ごろの災害を想定した対応を考えてみるなども意義あることではないでしょうか。非常食・保存食のひとつ燻製つくりを行いました。

●“結び”の実践ー生活に役立つロープワーク

結びやすくほどき易い結び方を覚えましょう。普段の暮らしの中で応用できるものも多いですし、災害時等に自分が救助されたり誰かを助けたりすることにもつながります。今回は「巻き結び」を体験しました。（写真㊤）

●茶室は宇宙ーー期一会の出会いを大切にしたい

新緑の中の一期一会のこのひと時、一服のお茶をいただきました。この広い宇宙の中で、私たちが存在していることや出会いの不思議、時間の問題などについて語り合いました。（写真㊨一服のお茶、無心のひと時・・・）

●暮らしを考えるー私たちの消費生活を見直す

物やサービスが溢れています。問題になっている原発も、ひたすらにより快適な暮らしを求めてきた私たちにも責任の一端があります。“賢い生活者”であるために私たちはどう考えどう行動すればよいでしょうか。里山でのいくつかの里山体験を通して、私たちの日頃の暮らしを見直すとともに、災害への備えを考えたり、“里山ライフ”を取り入れることができないかなどを話し合いました。

報告者　いちはら里山クラブ　風間俊雄

テ　ー　マ:「里山で旬の山野草を楽しむ会」
日　　時: 2012 年 4 月 21 日（土）10：30～15：00
場　　所: 市原市古敷谷　いちはら里山クラブ活動場所
参　加　者: 一般参加者１５名、会員２３名、計３８名
ス タ ッ フ: 風間俊雄、　いちはら里山クラブ会員
趣　　旨

山野草採りの開始

人が里山に手を加えることにより素晴らしい豊かな里山が保たれ、そこから生み出された山野草を自ら採取してその場で料理し、いろいろな旬の山野草を味わい、多くの人達に里山の素晴らしさを知ってもらうこと。

内　　容

山野草料理を頂く

主催者側代表の挨拶と本日のスケジュール等説明の後早速、参加者全員で山野草採りを開始した。
山野草採りの場所は、「いちはら里山クラブ」が活動している古敷谷の休耕田周辺及び裏山の雑木林等であるが、普段の活動で田んぼ周辺の草刈り、雑木林の下草刈り等を行って日当たりも良くなっており、山野草を含めいろいろな植物が元気良く芽生え始めていた。
この場所では休耕田周辺の収穫が多かったが、採れたものは、ヨモギ、クレソン、セリ、ノビル、コゴミ、ギボシ、ハリギリ、ワラビ、その他多くの山野草を採取できた。これらを材料に、当クラブの会員や参加者の女性群を中心に天ぷら、生食、和え物等沢山の料理が作られ、初めて食する珍味のものも有り、里山で採りたてのものをその場で料理して食べることを初めて経験する方も多く皆さん満足そうな笑顔で盛り上がった。また、飲み物は雑木林に育っているクロモジの枝を煎じて飲むクロモジ茶の、色（紫）香りを楽しみながら頂いた。美味しい山野草料理を楽しんだ後、午後は、風間代表から資料により「山野草の薬効」の説明を受けて里山の素晴らしさを改めて認識した。

木馬（きんま）引きの実演

本日の行事は、旬の山野草を楽しむことが主な目的であったが当クラブの里山活動の状況を紹介する意味で、山野草に関する行事の後、木馬（きんま）引きの実演を行った。木馬（きんま）とは山で伐倒した材木を運び出す道具として機械類が導入される以前に材木を人力で引っ張り出していた道具である。当クラブの会員が作成した木馬（きんま）とこれを引っ張る強力の会員に参加者から大きな拍手が湧きあがった。

ま　と　め

里山を手入れすることにより里山が蘇り、里山とはこんな恵も頂ける素晴らしい場所であると云う事が少しでも判って頂ければと思った。昔は里山と人が共存し、里山を人が手入れし、人は里山からの恵みをもらっていた。しかし生活様式の変化に伴い里山の荒廃が目立ち、人は里山の素晴らしさを知らずにいるのではないだろうか。私達里山活動に関わる者としては、まずはいろいろな行事を通して、多くの人々に里山の素晴らしさを知って頂き、1 人でも里山愛好者が増え、美しく豊かな里山が育って行くよう努力して行かねばならないと考えている。

第９回里山シンポジウム分科会報告　　**第 6 分科会**

報告者　小西由希子

テーマ：**生物多様性農業による地域づくり・トキ再来の夢とともに**
日　時：2012 年 9 月 17 日(月)
場　所：会場：幕張メッセ国際会議場　101A 会議室
参加者：50 名　協力：ちば・谷津田フォーラム　NPO 法人ちば環境情報センター
スタッフ：総合司会・小西由希子（ちば環境情報センター）
パネラー・藤井隆博（佐渡市農林水産課生物多様性推進室）
中村俊彦（千葉県生物多様性ｾﾝﾀｰ･県立中央博物館）
太田　勲（印旛沼広域環境研究会）
佐藤總子（谷当里山計画 NPO 法人バランス 21）
木下敬三（さんむ・アクションミュージアム）
遠藤陽子（千葉自然学校）
コーディネーター・
金親博榮（ちば里山センター・里山シンポジウ実行委員会）

写真 1

概　要:**佐渡市のトキ保全や千葉県内の谷津田・里山の保全活動の報告の後、会場とのやりとりから課題をあらいだし、トキが舞うような千葉の谷津田や里山再生のための取り組みを考えた。**

藤井:佐渡市は平成 20 年認証米制度（農薬 5 割減）を発足させ，イトーヨーカ堂や生協で新たな購買層を開拓した。作付けのうち 1/4 が冬季湛水で、生き物を育む農法で作ったものを認証米としている。有機は手間がかかるので、行政からは強くは要請していない。認証米はランク付けし、農薬 8 割減のものはプレミアム。減農薬の地域以外ではラジコンヘリで農薬散布。購買層もいろいろなので米を差別化して売りたいと思っている。平成 23 年、24 年で認証米耕作地拡大の伸びは緩やかになってきている。

トキのえさは夏場不足しがち。冬はあまり死なない。棚田より平場の田んぼ、住宅地や車が通るところにもいる。市民団体は 5 団体くらい。観光客は、1991 年の 120 万人から半減。佐渡にぜひ来てほしい。ヒナの誕生で寄付が増えたが、寄付は島外のほうが多い。**佐渡**には、クマ･イノシシはおらずタヌキ以外特に大きな被害はない（被害額 665 万円）。ボランティアの市民モニター制度がある（30 人くらい）。大学生や生協の顧客による稲刈りツアーなど。千葉県は市民活動が盛り上がっているように感じる。

太田：昭和 35 年ごろまで印旛沼で泳げたが総合開発で汚れてしまった。飲料水源として 20 年間、5 円/トン、18 億円も浄化のために払ってきた。浄化は流域で考えるべき。有機農業といっても、農家は収益性がなければやらない。千葉県のエコ農業は 5%に満たない。市民がエコ農業をいかにフォローしていくかが大切だ。今年から佐倉市和田の谷津田で農家の方と冬季湛水･不耕起栽培による米作りをはじめた。

佐藤：今年できた団体。千葉市若葉区谷当町で、谷津田再生・里山原風景の復元を目標に、ヨシを刈って、岩澤信夫氏が提唱していた「冬期湛水・不耕起栽培」で「生物多様性の米作り」をはじめたところ。目標は「ホタルの里」だが、水辺の生き物が増えるように頑張りたい。

金親: 20 年以上前から「わたしの田舎」として里山の恵みを享受し、故郷のように自然に触れる体験をと谷当グリーンクラブを続けてきた。市の「谷津田の環境保全地域」に指定（報償費として 10 円／㎡）されているが、あまり知られていない。里山コミュニティーの再生を目指している。

木下：山武市にトキを呼びたいという思いでやっている。8 年前に谷津田を借り受け、一町一反歩の谷津田を子どもの遊び場にし、また果樹園プレーパーク、ツリークライミングもやっている。成東駅前にも放棄田が広がっており、ここもなんとか活かせないかと考えている。

遠藤：都市の力をどう生かしていくかが大切。シニアで実践活動を希望する人の力を引き出しつなぐ場を見つけていくかが大切。地元にお金が落ちる仕組みも必要で、需要はあると思う。この方向で情報交換する場をつくっていくことが大事だと思う。佐渡のトキツアーを考えたい。

中村：千葉県の市原市五井には太平洋岸で最後のトキの生息記録がある。トキ一羽あたり佐渡では水田など 33ha 必要ということだが、豊かな谷津田のある千葉ではそれほどの面積は要らないだろう。佐渡で増えたトキは冬期の豪雪の際などに南下するとおもう。今後、佐渡で野生のトキが増えていけば、千葉にトキが来るのは時間の問題と思う。

小西：千葉市で谷津田保全をはじめて 13～14 年。千葉県の生物多様性戦略を県民で進めていきたい。千葉市も生物多様性戦略や地域連携保全計画を作る予定で、そこに市民が参加していく必要がある。将来的に農薬をなくしていく方向に働きかけていきたい。福島原発事故の影響にも正面から向き合っていきたい。

会場から（荒尾）：千葉は餌場が安定している。2005 年、白鳥が数千羽瓢湖から夷隅に来た。大豪雪で田んぼが凍結し餌場がなくなると、白鳥やガンと一緒にトキも千葉に飛来する可能性がある。

第７分科会

報告者　大島健夫

分科会名：　**里山とアート分科会**

テ　ー　マ：　里山発・アートを通して心をつなぐ

日　　時：　2012 年 12 月 15 日（土）

会　　場：　TREASURE RIVER BOOK CAFE（千葉市中央区登戸）

参加者数：　30 名を想定

スタッフ：　イダヅカマコト／大島健夫／林みね子／増田淳

趣　　旨：　イダヅカマコトと大島健夫が共同開催してきた千葉で唯一の朗読オープンマイクイベント「千葉詩亭」の三周年記念イベントを、里山シンポジウムの協賛企画という形で広く様々な表現者、アーティストを集めて拡大的に開催し、ひいては里山シンポジウムの活動のアピールの場ともする。

内　　容：

開場 17 時 30 分／開演 18 時、入場料 1000 円（1 ドリンク付）。司会は大島健夫。オープンマイク参加者の持ち時間は一人あたり 5 分を基本とする。イベント中、里山シンポジウムからのパブリシティーの時間を設ける。里山シンポジウムの活動に関する趣旨説明や紹介、また、可能であれば会場内に展示等を行う。千葉色、里山色を打ち出すため、そのような趣旨にふさわしい参加アーティスト、パフォーマーを、事前にある程度確保する。

ま　と　め：

単なる「里山シンポジウムの活動の宣伝」を含む「オープンマイクの羅列」にとどまらず、それらをうまく融合させ、かつ、多くの方に楽しんでいただける時空間の構築を目指す。

従来、「千葉唯一の朗読オープンマイクイベント」を冠とし、外部からの訪問者を受け入れつつ地域に根付いた形での発展を目指してきた「千葉詩亭」と、「里山活動」との、不自然さがない形での親和を目指す。従来、朗読だけを見てきた人に対しては里山活動の素晴らしさを、また朗読や様々なパフォーマンス、アートに触れたことのない人に対してはそれらの楽しさを、それぞれ交換的に提示することを希求する。

報告者　稗田忠弘

分科会名	**森林・林業分科会**
テーマ	なるとうこども園現場見学会＆木質バイオマスセミナー
日時	2012 年 10 月 27 日(土) 13：00～16：30
会場	なるとうこども園、さんむの森中央会館　1 階視聴覚室
参加者数	29 人
スタッフ	さんむフォレスト、LLP グループ「木と土の家」
趣旨	山武市では住宅建築やペレットストーブ、ボイラーへの助成など積極的な施策が実施され、市民レベルでも森林再生を目的にした様々な活動が行われている。活動の主張や手法は多面的であっても、資源循環による持続可能な山武という、あるべき山武の姿を目標として共有したい。木質バイオマスのエネルギー利用として一つの到達点といえるバイオマス発電について理解を深め、その知識を共通の道しるべにしたい。

なるとうこども園現場見学会

なるとうこども園は、約 2800 ㎡（847 坪）の規模の建物を木造平屋建てで建築中である。山武市はこの建築を地元産のサンブスギでつくるべく計画を進めてきた。この規模の木造建築を集成材などの工業化した素材を用いずに実現することは多くの困難を伴うが、あえてそこに拘る背景には資源循環型のまちづくりの理念が背景にある。見学会では、山武杉は実際の木材使用量の 1/2 程度しか使われなかったことなどが明らかになったが、その原因が発注の方法にあるのか、または地元業界の供給能力の問題なのかわからない。スローガンを掲げながら腰砕けになった原因は明らかにし、今後の糧にしなければならない。

講　　演：花島 浩 氏（NPO 法人 元気森守隊）「山武木の駅プロジェクト活動状況について」

・木の駅プロジェクトを実施中で、年度内に 1000ｔの木材を集めたい。現在 200ｔ。
・バイオマス発電の実現にはコンスタントに材が集まることが必要。
・買い取り費用の一部を地域通貨で支払うなど、地域の経済と結びつけた展開をしたい。
・木材の年間成長量に見合う量で発電したい。他に竹や農業バイオマスも使える。

講　　演：大野航輔 氏（㈱森のエネルギー研究所）「山武木質バイオマス発電所事業化に向けて」

・国の再生可能エネルギー全量固定買取制度実施の背景、仕組み。
・木質バイオマス発電の現況、発電の仕組み。山武ではガス化発電を目指している。
・発電規模 10,000Kｗで、燃料消費量 156,617ｔ/年。山武の溝腐れ病の木材 300､000ｔでは 2 年分。
・電力だけの利用ではバイオマス発電の効率は 25～30％程度しかない。

ま　と　め：

山武では森林整備の NPO 活動、地産地消のすまいづくりや今回の講演のテーマになったバイオマス発電など、活動が多様化している。今回の見学会と講演会は､官民ともに目指すべきバイオマス利用の到達点について認識を共有する目的で開催したが､結果として理念がそのまま実現はしない現状が見えた。バイオマス発電も熱利用と合わせて効率を上げなければ、貴重な資源を費やすメリットがない。現状を再確認でき、今後を考える貴重な機会になったが、結論は木質バイオマスエネルギーの利用には、林業が成立していることが大前提になる、ということであった。

報告者　荒尾 稔

第２回 和田未来農業研究会 シンポジウム

この事業活動は、公益信託佐倉街づくり文化振興臼井基金からの助成を受けております

「新しい日本農業のかたち　和田から発信!! 」

開催日　：平成 24 年 10 月 28 日(日曜日)

午前の部　午前 11 時 30 分～午後 1 時

会　場　：佐倉市立和田公民館

「和田地区 秋の収穫祭」

今年、和田地区で新たな農法で生産・収穫された農産物を使って、おにぎりや、とろろごはん，豚汁や即席漬けなどなどを準備しました。

トマトやヤマトイモなどや新鮮な野菜類も、冬期湛水・不耕起移植栽培農法による新米も、“和田のおいしいレシピ” もご紹介します。

勿論その場での試食もできます。

午後の部　午後 1 時 15 分～午後 4 時

会　場　：佐倉市立和田ふるさと館

シンポジウム「生きものいっぱい田んぼで米づくり」

冬期湛水・不耕起移植栽培農法による安心と安全なお米や野菜づくりを目指します。
若い方も定年後の方も、この新しい農業を通じて、夢を実現してみませんか

挨拶

和田未来農業研究会 会長	藤井 毅
印旛沼環境団体連合会会長	太田 勲

基調講演

1 「米作りの大切さ」　立正大学名誉教授　富山 和子

水田は文化と環境を守る……24 回目をむかえた「米カレンダー」

2 「冬期湛水・不耕起移植栽培の魅力」　日本不耕起栽培普及会理事長　園原 久仁彦

無肥料・無農薬でつくる究極の米つくりとホタルの里つくり、そして地域つくりのありかた
長野県下で村おこしの実践活動で全国的に著名な活動実績をあげておられます。

ミニフォーラム　時間いっぱい会場からのいろいろなご質問にお答えさせていただきます

パネラー	不耕起栽培普及会 理事長	園原 久仁彦
冬期湛水・不耕起移植栽培農法の試行	和田未来農業研究会 会長	藤井 毅
水田耕作を永続的に継続させるために	和田未来農業研究会 理事	斎藤 和
お米の価値を社会に伝えることが仕事	(株)のざわ 代表取締役	野沢 純子
アドバイザー		富山 和子
コーディネーター	千葉まちづくりサポートセンター 副代表	栗原 裕治

● 富山和子先生の次年度カレンダーと著書を会場でサイン入り販売もさせていただきます。

報告者　　中野真樹子、手塚幸夫

房総のアライグマ　～ その現状と対策 ～

主　催　　野生動物分科会・里山里海分科会・関西野生生物研究所
後　援　　いすみ市・夷隅郡市自然を守る会・いすみ夢鯨の会
　　御宿オーガニック・そとぼうワールド
　　ちば谷津田再生会・一宮ネイチャークラブ
日　時　　２月９日(土)　１４：００ ～ １６：３０
会　場　　いすみ市農山漁村体験案内所
責任者　　なかのまきこ・手塚幸夫
参加者　　３６名
内　容　　①話題提供
　「夷隅地域の野生哺乳類の今昔」～哺乳類の分布状況アンケートから～
　　報告：千葉県立大多喜高等学校生物部
　②講演
　「アライグマが日本中で大変」　～その対策と現状～
　　講師　　立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員
　　関西野生生物研究所代表　　川道　美枝子

【概要】

アライグマの捕獲数がダントツに多い夷隅地域、その生息状況と対策についてのセミナーを開催しました。

最初に、話題提供として、大多喜高等学校の生徒たちが行った野生哺乳類の生息状況調査の中間報告がありました。この10年、イノシシ、キョン、アライグマの目撃情報が急増していること、山間部から里山へ、そして住宅地へと分布域を拡大していることが報告されました。さらに、キョンとアライグマについては、分布域の広がり方に特徴があることなど興味深い話もありました。

続いて、川道先生の講演です。アライグマの形態・生活史から行動・食性についての概説の後、アライグマが里山の生態系に与えるインパクトや人の生活圏に侵入して引き起こす様々な影響について具体例を示しながら話して頂きました。特に、作物から水辺の小動物を好んで食べること、空き家や寺院の屋根裏で出産・子育てをすることを聞いて、会場のあちこちから「ええっ」という驚きの声が聞こえてきたのが印象的でした。

後半は、アライグマの生息確認法と捕獲法についての話でした。作物の食痕や外柱の爪痕で生息確認ができること、捕獲機の設置は家屋への侵入口の下がよいことなど、さらに、行政と民間が共同して効果的な捕獲を進めることの重要性など、被害防止と駆除について詳しい説明がありました。

最後に、アライグマは、狂犬病ウイルスを始めとして、ウイルスや細菌、寄生虫など、病原体のキャリアーとしての注意が必要なことが指摘されました。

当日は、県やいすみ市の担当者、農業関係者から地元高校生（７人）まで多様な人たちが集まり、川道先生の講演後に約１時間、熱心な意見交換がなされました。

〔報告：なかのまきこ・手塚幸夫〕

大多喜高校生の発表

川道先生の講演

フィールドミュージアム・三番瀬の会　佐藤聰子

テ　ー　マ：「三番瀬の干潟と周辺フィールド観察会」

日時・会場：①　３月 20 日（春の生きもの観察：江戸川放水路）
②　７月１８日（海浜植物：市川・行徳自然観察舎）
③　８月５日（三番瀬夏休み冒険学校）
④　８月 18 日（プランクトン観察：谷津干潟自然観察センター
⑤　９月 15 日（三番瀬の秋の生きものを見つけよう！）

予　　定：⑥ 10 月 14 日（長田谷津田観察：市川自然博物館）
⑦ 12 月２日（日）三番瀬渡り鳥観察会
⑧ 2013 年１月 27 日（ノリすき体験：浦安市郷土博物館）
⑨ ２月 16 日～３月 31 日（渡り鳥写真展、ｾﾐﾅｰ、ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ（3 回予定）：船橋市飛ノ台史跡公園博物館）

主　　催：　フィールドミュージアム・三番瀬の会、里山シンポジウム分科会

参　加　者：観察会参加者：２０人～３０人

スタッフ：田島正子、川西清子、佐藤聰子、杉本秀樹。田澤浩一、大前るみ、田久保晴孝、栗原裕治、宮寺卓、（田村茂俊）、ちば環境情報センター　小西由希子

趣　　旨：三番瀬の干潟から周辺地域のフィールドに千葉県立中央博物館を拠点として地域の博物館、各種教育機関、大学、研究機関、市町村、任意団体と連携しながら、フィールドでの調査、観察会などを通して市民の自然環境の関心を専門的立場からノウハウの提供や情報の収集、発信を担ってもらいながら、地域住民が自主運営して、地域のネットワークを広げます。

指　導　者：駒井智幸、由良浩、（千葉県立中央博物館：学芸員）青山莞爾（元東邦大学生物科教授）千葉県野鳥の会

内　　容：観察会ごとにちらしを作成。ちばの自然環境保全活動支援事業　の助成を受けています。

②７月 18 日（土）市川行徳観察センターでの海浜植物と昆虫観察会
始動：由良浩氏

① ３月 20 日　三番瀬と繋がる江戸川放水路での観察会（アナジャコやトビハゼの多い泥干潟）始動：駒井智幸氏

④夏休み生きもの観察会・炎天下の中。熱砂でタマシキゴカイも砂の上に飛び出しぐったり。私たちも・・・

④海のプランクトンを見よう！谷津干潟自然観察センター
始動：青山莞爾・ミジンコ倶楽部

⑤三番瀬秋の生きものを探そう！始動：駒井智幸氏の秘密兵器で。スナモグリを捕獲、生態をじっくり観察。

まとめ：昨年は（震災による液状化で、三番瀬の海辺では、観察会が出来ませんでした。今年は８月から三番瀬の干潟で生きものたちに出会えました。地震で陥没した干潟は大潮の時でも私たちが歩けるところが少なくなりましたが、生きものたちは食物連鎖を見せてくれました。

第 12 分科会

いやしの森の会　増田 淳

分 科 会 名：**里山と医療・福祉分科会**

テ　ー　マ：森林療法ワークショップ

日時・会場：4 月 15 日（日）泉自然公園　22 名　　5 月 20 日（日）船橋県民の森　35 名
7 月 15 日（日）加曽利貝塚公園　33 名　　9 月 16 日（日）印旛沼公園　19 名
11 月 25 日（土）市川市植物園　　平成 25 年 2 月 17 日（日）房総風土記の丘

趣　　旨：森林を時間をかけて歩くことにより、景色の移ろいや風や気温の変化などを体感し、癒し効果が得られる内容です。

ス タ ッ フ：赤城建夫（講師・ちば発達評価心理指導ルーム所属）、林みね子、増田淳

内　　容：（9 月 16 日実施・印旛沼公園）

印旛沼を望む展望台。水面から吹き上げる風を全身に浴びる。

中世の城跡の空堀。歴史のロマンを感じながら、列になって歩く。

道端の湧水で喉を潤し、長時間歩いた疲れを癒す。

まとめ

本年度は、通常のセラピーコースの他に、森林の周囲の里山に足を伸ばし、その土地の生活文化の一端を窺い知ることができました。

障がいのある人もない人も、お互い助け合いながら、四季の移ろいを堪能することができました。

第 13 分科会

ふれあい千葉　代表世話人　藤崎義雄

分 科 会 名：里山団体・地域相互連携による里山活動

里山団体名：「ふれあい千葉」

開 催 日 時：平成 24 年 10 月 13 日（土）10：00～（9：30 集合）

会　　場：東国吉公民館および「ふれあいの森」周辺里山

参　加　費：500 円

連絡申込先：ふれあい千葉　代表世話人　藤崎義雄（☎0436-95-0584）申込締切 10 月 6 日

趣　　旨：本活動の特徴は、会員だけではなく、活動を希望する全ての方々に参加していただいて里山整備活動を進め、相互に懇親を深め連携の和を広げてゆこうとするところにあります。

１．会費はなく、参加費（500 円/日）により運営。

定例会は 1 泊 2 日を原則としている。（夜の交流会 2,000 円、宿泊 6,000 円）

２．「森林・竹林・里山を整備する仲間の会」（関東一円、一関、旭川を含む 15 団体で構成）に所属している。地域横断の運営により遠隔地からの参加が多い。

３．「（社）千葉県緑化推進委員会」のサポート等、他の機関や団体との協働にも参加している。

今回の分科会では、こうした活動とそのシステムの紹介を軸に開催します。

内　　容：　（詳しくは「案内チラシ（ふれあい千葉だより 146 号）」をご覧ください）

１．趣旨説明

２．活動報告

３．基調講演

４．質疑応答

５．昼食

６．活動地散策及び第 33 回定例活動

７．（オプション）交流会（土気・染谷旅館）

写真㊧＝今日の作業を終えて記念撮影

写真㊨＝植樹（もみじ）と植栽した水仙

米沢の森を考える会　石川松五郎

◆分 科 会 名：映像と音で綴る里山分科会
◆テ　ー　マ：里山の美しさを映像と音で再認識する
◆日　　時：平成 24 年 5 月 27 日（土）12：30～13：00
◆会　　場：東海大学付属望洋高校記念講堂
◆主 催 団 体：米沢の森を考える会
◆分科会リーダー（報告者）：石川松五郎
◆協　　力：チーム・ユメット、東海大付属望洋望洋高校（放送部）

趣　　旨：米沢の森を訪れると、よく整備・維持されていることや魅力の創出に「米沢の森を考える会」（鶴岡清次代表＝会員 45 名）が一生懸命取り組んでいることが分かります。

そこで私は、この里山のもつ自然を四季にわたり写真に撮り続け紹介し、たくさんの方に知って頂くと共に、ここを訪れ自らの五感で触れて欲しいという願いから制作したものです。

内　　容：県内からこのシンポジウムに参加される方が多いので、先ず、地元市原市を動画によって紹介しました。古くは上総の国の国府が置かれ栄え、現在は京葉工業地帯の中心地として発展する一方、自然も豊かで南部には養老渓谷がありその流れ、養老川は沿線を潤し、東京湾に注ぐ。

このあと、米沢の森と里を写真と音で構成したスライドショーで四季にわたり紹介。望洋高校の放送部の生徒にナレーション協力をしていただきました。

春は、スミレやシュンラン、コブシなどが早春を告げ、ヤマザクラが点在して咲き、木々の芽が萌え始めると同時に、谷津田では田植えの準備が忙しくなる。

夏は一面の緑が山を包み、里山は野の花が咲き、小鳥がさえずり、カエルの鳴き声が谷に響きわたる。やがて青空と白い雲の盛夏、谷津田の稲が黄味がかると取り入れが始り、しばらくすると柿が色づき森は紅葉へと移る。

晩秋、枯葉は森の道を埋め尽くし、それをかき分けるように登るのがこの季節だけの趣きだ。

冬期には数度となく雪が降る。下界では積雪にならなくても頂上付近は白銀の森へと姿を一変させ、木々に積る雪は北国の山中に居るような錯覚を覚えるほど。

米沢の森の頂上は御十八夜と呼ばれる。標高 162ｍの三等三角点が設置されており、県内の東西と北のこれより高い山は長柄町の権現森（172ｍ）だけ。したがって眺望は素晴らしい。

東京湾を隔て西に富士山、そこから北へと目を転じていくと国内 2 位の高さの南アルプス北岳に始まり、奥秩父、丹沢、奥多摩、東京都心の高層ビル街の上には浅間山、上越連峰、日光男体山、真北には筑波山、東には太平洋、南には県内一の高さの愛宕山（408ｍ）、牛久盆地の向こうには大島の三原山。未知の展望の発見を期待して森へ通い、遭遇した時は感動した。

おすすめは霧の出る時。幾重にも重なる中房総の山並みに霧がたなびき、ここが 162ｍの高さとは信じられないほどの素晴らしいパノラマに出会えることもある。

森や谷津の四季の営みと展望の概要をこのスライドショーを通して感じとって頂けたら幸いです。

ま　と　め：米沢の森をよりリアルに知ってもらえればと企画したものです。活動状況も数枚含まれていたのですが、これだけでは充分でなかったように思います。

今後は会員の方々が尽力されている様子や、たくさんのイベントなど含めて紹介していきたいと思います。次ページにスライドショーのひとコマをご紹介します。（カラーでないのが残念ですが多少なりとも雰囲気を感じ取っていただければ幸いです。）

霧に朝日射す

雪解けのハンノキ林

森でお弁当

太平洋からの日の出

森の整備作業

第９回里山シンポジウム分科会報告

報告者　ちば谷津田フォーラム 中村俊彦

テーマ：**「里山再生と生物多様性の力」**
― 持続可能な生態系サービス指標としてのトキ（鴇）再来の夢 ―

日　時：2013年2月17日(日)　10:00～16:30　(交流会17:00～)
会　場：市原市五井会館　4階大ホール　**参加者**：88名
主　催：ちば・谷津田フォーラム，ちば環境情報センター，里山シンポジウム実行委員会
後　援：市原市，印旛沼流域水循環健全化会議
協　力：ちば里山センター，千葉県生物多様性センター(千葉県「県民の環境活動支援事業」)

趣　旨：千葉県市原市五井は，太平洋岸最後のトキの飛来地です．「トキの再来」，それは生物多様性がもたらす豊かな生態系サービスの象徴と言えます．このシンポジウムでは，中国の野生のトキの生息地における生態農業の現状や印旛沼流域での冬期湛水による米づくりから見えてくる生物多様性の力を学び，人と自然と文化とが調和・共存する持続可能な生態系モデルとしての里山再生とその活用を目指します．

プログラム(午前の部)：10:00～12:20

●総合司会　鈴木優子（環境カウンセラー）

●挨　　拶　佐久間隆義（市原市長）

市原市五井の金杉は昭和28年にトキの飛来が確認されており，これは太平洋岸の最後の記録です．現在この地は工場地区になっています．私たちは産業や経済の発展で豊かになりましたが，今後はトキの来るような豊かな環境，またブータンの国民総幸福のように，みんなが幸せに生きる社会をみんなで目指していく必要があると思います．

●趣旨説明　中村俊彦（ちば・谷津田フォーラム代表）

人の暮らしは，助け合う仕組みとして社会があり，それは自然に支えられています．自然豊かな千葉県では数万年前から多くの人が住んでいました．特に谷津田周辺はトキの塒としての森や餌場としての田もあり，生物多様性の宝庫でした．谷津田や里山の再生は豊かな生態系サービスのシンボルとしてのトキ再来も夢ではないと思います．

●基調講演「トキの里づくりと生態農業」蘇 雲山（環境文化創造研究所参与・主席研究員）

1981年に中国では絶滅したと思われていた7羽のトキが洋県で発見されました．その後，中国では徹底した生息地での保護活動がなされ，また生息環境の改善のために農薬を使わない生態農業によって増え，現在では中国，韓国，日本でも飼育され，約1000羽のトキがいます．今後は遺伝子の多様性確保の意味からも分散飼育と野生個体の増加が重要です．私は千葉市に住んでいますが，千葉の環境は温暖で谷津田などもあり，冬の餌の確保も可能でありトキにとっても大変良い環境です．千葉でも分散飼育ができればよいと思います．

●コメンテーター　金親博榮（里山シンポジウム実行委員会代表）

千葉県では，里山条例や里山センターもあり，里山での農林業の活性化や生物多様性の回復に向けた取組が活発である．中国での生態農業を参考にして，千葉にもトキが来るような里山活動に頑張りたい．

プログラム(午後の部)：13:30～16:30

●話題提供　座長：栗原裕治（千葉まちづくりサポートセンター副代表）

・「関東生態系ネットワーク構想とその現状」関　健志　((財)日本生態系協会事務局長)

コウノトリやトキを指標とした豊かな環境づくりとして関東生態系ネットワークの取組が展開されている．そのためにはヨーロッパのようにたとえ開発しても生物多様性の損失は許されない徹底した環境重視の法律制度を日本にも導入する必要がある．

・「冬期湛水の米づくりの実践とその将来」三門増雄　((有)らいすぼうい代表)

2005年から冬期湛水の米作りをはじめた．無肥料でほとんど農薬も使わない状態であったが，米の収穫に悪影響はなかった．周辺農家とは異なる農法で迷惑をかけたこともあったが，2012年の冬から白鳥も飛来し，さらに夢が広がった．鴨猟の人が良く来るがこのような水田は禁猟区にしてもらいたい．

・「印旛沼流域での冬期湛水試験結果」中村俊彦（千葉県生物多様性センター副技監・県立中央博物館副館長）

印旛沼干拓地で冬期湛水試験を実施し，冬期湛水による生物多様性が高まり，水質浄化の機能も確認された．そして実験当初は最初低下した米収量は3年目には，慣行農法も上まわる結果も示された．

・「市原市での里山保全活動とその将来」風間俊雄（いちはら里山クラブ代表）

市原市は15をこえる市民団体が，自ら元気に里山の保全・再生の活動をおこなっている．市も協力的であり，この活動には臨海部の工場地帯に勤務しリタイアした人も多く参加しだした．

●総合討論　ファシリテーター　小西由希子　((NPO法人)ちば環境情報センター代表)

千葉の自然の豊かさと谷津田・里山の素晴らしさを知り，今後のみんなの努力によって，トキの再来も決して夢ではないことがわかりました．またこのような取組は将来の人間社会にも大変重要なことが理解されました．

風呂の前里山保存会　　中山美代子

風呂ノ前　春の自然観察会

里山シンポジウム 2012 分科会実施報告

日時：平成２４年４月８日（土）晴れ
会場：風呂の前カタクリ群生地とその周辺の谷津田
主催：風呂の前里山保存会
後援：里山シンポジウム実行委員会
　　NPO ちば里山センター
　　講師２人を含む参加者数　５３名

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・風呂ノ前里山に自生する希少種、殊に南限といわれるカタクリグ群生地を紹介し、里山の魅力、自然保護を PR する観察会。
・市津公民館より下野谷津田～風呂の前～永吉～市津公民館まで

以上

カタクリ自生地北斜面

斜面でカタクリに見いる

広場で講師の説明を受けている

広場の斜面で講師の説明

観察会の終盤、永吉菜の花畑より

この事業は豊かで美しいちばの自然環境保全活動支援補助事業の助成を受けています。

第９回里山シンポジウム in 市原
（閉会の挨拶）

里山シンポジウム実行委員会副代表
東金青年の家　並木秀幸

・小西由希子

林先生も遠山先生も、私たちの活動を支援したいということで、実はボランティアでご協力をいただいております。手作りの活動でして、まだまだ足りない部分もあるかと思います。市原の問題、里山の問題、皆様にも参加していただいて、広げていきたいと存じます。

最後になりましたが、並木の方からご挨拶をさせていただきます。

・並木秀幸

昨年度より、里山シンポジウムの実行委員会をさせていただいております、東金青年の家所属の並木と申します。本日は一日、長い時間ありがとうございました。普段、私も子どもの相手などで里山を使っております。本日は、里山の持つ魅力や力を再認識いたしました。どうもありがとうございました。以上をもちまして、里山シンポジウム in 市原、終了とさせていただきます。ありがとうございました。

第９回 里山フェスティバル「里山シンポジウム」報告書
里山に託す私たちの未来２０１２「里山の魅・力発見」
～中房総の原風景を支える底ヂカラ～
２０１３年3月１０日

発　　行：里山シンポジウム実行委員会・ちば里山センター
（社）千葉県緑化推進委員会・千葉県
編　　集：里山シンポジウム実行委員会

里山シンポジウム実行委員会　　公式 HP：http：www.satochiba.jp

里山に託す私たちの未来

第９回里山シンポジウム in 市原

里山シンポジウム実行委員会
ちば里山センター
㈳千葉県緑化推進委員会
千葉県